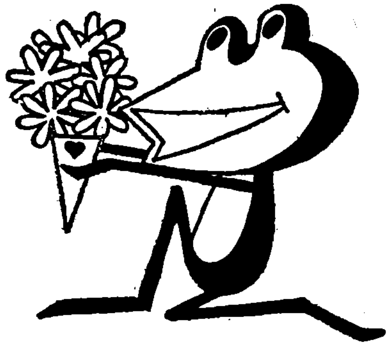


ムズムズ病！

虫にさゝれて　ムーズ　ムズ
じんましんで　ムーズ　ムズ
雑草かぶれで　ムーズ　ムズ
お化粧かぶれで　ムーズ　ムズ

かゆいときにはコーワの

レスタミン軟膏

●ハイキングに　ご家庭に！
よい香り　よくのびる　クリーム
みたいなお薬です。　一〇〇円

Kowa
興和新薬株式会社
東京・名古屋・大阪・福岡

綿　糸
鷹の羽　豊福

綿　布
雷鳥　富士鷹　海猫

スフ糸
銀双鷹

合繊糸
タカナロン
タカビロン
タカテロン
タカサロン
タカアロン

各種　混紡糸

愛知紡績株式會社

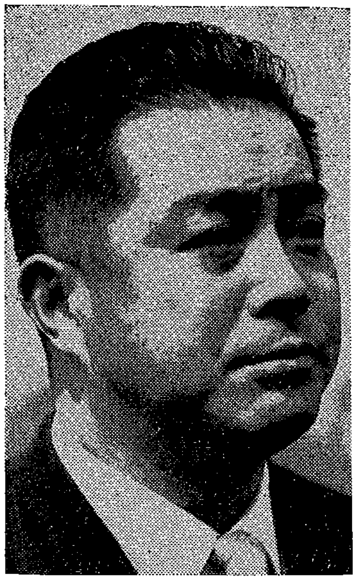
本　社　名古屋市中区南園町2丁目4番地
電話（名古屋）23—6171，8681

東京営業所	東京都中央区日本橋堀留町1丁目13番地　堀一ビル 電話（東京）661—4723,4743,4752,4779
大阪出張所	大阪市東区北久太郎町2丁目28番地 電話（大阪）26－5377～9
安城工場	安城市今村町前之池90番地の1
名古屋工場	名古屋市西区山田町大字上小田井字道間1700番地
山方工場	半田市東洋町2丁目28番地
榎戸工場	常滑市榎戸字平芝8番地

巻頭言

日本ハンドボール界の進む道

日本ハンドボール協会理事長
高島　洌



本年最大の行事であったルーマニア招聘も、去る六月十五日より七月三日にいたる間、七会場、十試合の日程を無事終了した。

結果はすでに周知のとおり、十戦十敗の成績であったが、しかしながらオリンピック東京大会への準備の第一年度に、若い選手達が世界の強豪を相手に、〃俺達もやれば出来るんだ〃という自信を持ち得たことは、誠に意義深いものがある。

そこで彼等が十試合に残した足跡に検討を加えるとともに、今後わが国ハンドボール界の進むべき道について考えて見たいと思う。

勿論これは小生の一私見に過ぎず、斯界に問題を提起するつもりであるが、今後それぞれの機関において十分検討を加えられたいものである。

先づ来日ルーマニア選手の全員がいづれかの試合に出場したが、彼等全員の間にほとんど技術的差異は認められなかった。これは彼等の厚い選手層を物語っている。普及（底辺の拡充）と同時に、国際的選手の大量養成の急務を痛感する。

次に各選手が、基礎に極めて忠実であった。具体的に一、二の例を挙げれば、全試合を通じ、必ず六人攻撃を実施した。

このことは詳細に述べる必要もないくらい、有利であることは間違いない。規則に許される最大限の有利なゲームを行うことは、最も基礎の理念でなければなるまい。又雨中戦には、必ずボディキャッチを実施した。このことも今更言うまでもなく、あたりまえのことである。あたりまえのことを、あたりまえに行なった彼等に改めて敬意を表したい。

以下一、二の例は、今日からでも実施することが出来る。しかし日本人として当然背負わなければならない宿命がある。それは体格、体型より生ずる基礎能力の差であろう。

これは、四年後のオリンピック、或は八年後のオリンピックに対しても、永久に考えられる根本的差異である。この根本的差異を他の要素で如何にカバーするかということが、今後の技術的指針であり、進むべき道であろうと考える。

そこで先づ考えられることは、スタミナの養成であろう。リーチの広さ、ステップの大きさ、投球距離の不足等による不利は、現在の段階では走り回り、走り抜くことによってカバーせざるを得ない。彼等が五十米走るところは、こちらが百米走ることによって対抗するのである。そして六十分間、間断なく走りまくるスピードと持久力を養うことが出来れば、体格による不利を克服し、且つ前述の六人攻撃、六人防禦にも徹することが出来るだろう。

次は科学的研究である。如何に高邁な理想も、徒手空拳では効果は少い。そこで科学的分野の協力を求め、前述のスタミナの養成から、投擲力の増大、或は日本人に適した戦術迄も研究すべきであろう。

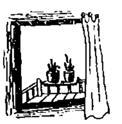
第三には、それぞれのチームの監督、選手諸君が、確固たる〃土性骨〃を持つことである。これは、〃勝利への執着〃であり、〃スポーツの根性〃である。

いかに良き理論があり、科学的に裏づけされても、それを行うものは、監督であり選手自体である。

自分自身に打ち克つ者のみが、相手に勝つ栄光を与えられることを、はっきり認識してほしいものである。

その〃土性骨〃は、血を吐くような猛訓練から徐々にはぐくまれるものである。

×　×



再び楽観許せぬ事態に

＝東京五輪ハンドボール＝

来年五月に持ち込し　具体化しそうな"種目制限"

JOCの、オリンピック東京大会二十二種目開催の再確認で（本誌先号詳報）実現濃厚となった「ハンドボール」は、八月十九日から、ローマで開かれた第五十七回IOC総会で、再び「種目削減案」がクローズ・アップされ、「ハンドボール採用問題」は、またしても、振り出し点に戻ってしまった感が強い。——

第五十七回、IOC（国際オンピック委員会）総会は、八月十九日から、ローマのコンゲレス会館で、ブランデージIOC会長（米）以下、世界各国のIOC委員を集めて開催されたが、この総会の主要議題の一つであるオリンピック東京大会開催種目問題は、現在一部IOC委員によって強く提唱されている。「オリンピック種目縮少案が、具体化しつつある時だけに特に大きな注目をもって集められていた。とりわけ、一九三六年のベルリン大会以来、オリンピック史上、二度目の採用が予定されていた「ハンド・ボール」は、IHA（日本ハンドボール協会）としても、日本におけるハンドボール界の将来の、命運を賭けた問題だけに、その決定を、この総会に託して万全の準備を進めていたが、八月二十二日の総会で、これまで幾度か取沙汰されていた「オリンピック種目縮少案」が俄かに、クローズアップされ「一九六四年のオリンピック大会から、開催種目は最低十五種目、最高十八種目に制限することにした」と云う具体的な発表まで行われると云う予想外の会議の進行ぶりで再び楽観を許せない事態になった。もっとも、この決定は、後刻、更に慎重な検討の要があると云うことになり、「決定保留」が申し合わされ、一応今回の総会では、種目制限に関する決議は、正式には、行なわれないことになったが、それにしても、一度は、前述のような、かなり濃厚な縮少案が発表されたあたり、各国IOC委員の間に、オリンピック種目制限がかなり支配的な空気になって流れているかが、うかがえよう。

ところで、JOC（日本オリンピック委員会）としては、先年、ミュンヘンで行なわれたIOC総会に提出したオリンピック東京大会回答書の中で、東京オリンピック実施種目として、陸上、水上、体操、レスリング、ハンドボールなど、オリンピック憲章で決められた二十一種目全部を回答しており、昨年末、外電で、IOCの種目縮少案が伝えられた後でも、もし、縮少案が成立しても、東京大会は例外として回答書に示した全種目を開催することを申し合わせその意向を強く打出し今回の総会の直前まで、この線は崩されなかった。ただし、二十二日の総会で「柔道」が、圧倒的な多数の賛成を得て、オリンピック二十三番目の正式種目として採用が決定されたために、一応、回答書の中から一種目をけずり、柔道を含めて二十二種目実施と若干、変りかけてはいたが、とも角も、JOCの今としても「ハンド・ボール」を含んだ二十二種目オリンピック東京大会実現は、非常に有望な線に到達していたわけで、二十二日の総会後、津島寿一体協会長も「種目の調整はいろいろ云われていたが十八種目になると、重大な問題なので改めて研究する必要がある」（共同）と極めて、慎重な態度を示しているほどである。十八種目に縮少されるとすれば、これは、JOCとしても非常に大きな問題となってくるわけで、同時に、IOCとしても、総会の空気が、必しも、満場、種目縮少案に賛意を示さなかった点を採り上げ、「次回（明年五月）のアテネ総会まで決定を保留し、さらに検討することを決めた。

このため、オリンピック東京大会の、開催実施種目は、その会期と共に、またしても、明年五月まで、その正式決定が延びることになり、同時に「ハンドボール」の採用も、その際まで、具体的な決定を見ないことになったわけである。JHAとしても、今回のローマ総会で、その決定が行なわれることを、七分通り期待していたために、いささか、拍子抜けのテイで、採用か、削減か一喜一憂しなければならないのは「やり切れない」と云った気持であろう。

今のところ、その採否は、五分五分。今回の総会直前まで、その実現が太鼓判と云われていただけに、この変化は、日本のハンドボール界にとっては、正直の所、この問題に関する限り「一歩後退」であり、「再び暗礁に乗りあげかけている」と云うのが、卒直な状勢分析であろう。

NHKの杉山運動部員は「二十二種目開催ならまず大丈夫。十八種目なら、いささか、不安である」とその見通しを語っているが何れにせよ、来年五月のアテネ総会まで、その決定が宙ぶらりんと云うのは、日本のハンドボール界にとって、焦慮の期間になりそうである。

ただ、ここで、希望的な見通しとしては㈠IHF（国際ハンドボール連盟）が、ハンドボール東京大会に非常に熱意を示し、ヨーロッパ諸国が、積極的な支援をしていること、㈡例十八種目になっても、東京大会は予定通り二十二種目行なう可能性が残されていること、㈢種目縮少案が必しもI

国際的援助が必要

＝難関の五輪ハンドボール＝

「全芝工大の善戦」も活路

オリンピック東京大会に於ける「ハンドボール」の採用は、再び難関にさしかかったようである。

先号の本誌では、その関係記事を巻頭にかかげて事態好転を告げていただけに、いささか後味の悪さに似たものを感じさせないではないが、しかし予想外にIOCにおける「種目削減」の空気が強かったのがこうした事態を招いたと云える。東ヨーロッパ諸国などの〝待った〟が入ってとにかく、その決定は、来年五月まで持込された が「種目削減」必至と云う声が濃いだけに、IHF（国際ハンドボール連盟）としても、JHA（日本ハンドボール協会）としても、これまでにない苦境に立たされたことは否めない。採否のカギは、東京大会で、全種目を行うか、十八〜十五種目にしぼるか、どちらが選ばれるかに懸けられているがこの点について田畑東京オリンピック組織委事務総長は、ローマ大会終了後の十一日、彼地で内外記者団に対して、「種目削減は施行されても東京大会は例外で、東京大会は全種目を行う」と語ったと云われる。しかし、十二日付の東京中日新聞紙上には、十一日の記者会見における田畑氏の談話として「ローマ大会で行われた十八種目の他に、バレーボール、洋弓、柔道の三種目を加えたい」と云う。ハンドボール関係者にとってはショッキングなニュースが掲載されているのはこの問題の前途の難しさを知るに充分であろう。また、ローマ大会の組織委事務総長M・ガローニ氏は「ローマ大会の経験から東京大会の組織委員会に対し、是非IOCと話合って大会の種目をへらすよう忠告したい」旨を語ったとも云はれ、どうも「ハンドボール採用」には暗い話ばかりが伝わって来ているのも不安である。JHAとしては、国内の結束はもとより、この際、IHFと密接な連絡を保って、積極的誘な致活動を展開すべきであり、国際的なバックアップなくして、この問題の好転は、もはやないと云ってもよい段階にある。ただ先の国際試合で全芝浦工大が、世界選手権準優勝のルーマニア選抜軍に、単独チームであり乍ら1点差の健斗を示した事実は、ルーマニア役員の談を待つまでもなく、この一戦によって、ハンドボールは、東京大会における日本の最も有望な種目に浮び上った。

JHAにとってこれは大きな利点である。JHAは、この点をもっと強く押し出すことも一策で、日本のハンドボール界が世界的水準にあることを、宣伝することはこの際、絶対に必要なことであり同時にこの問題の最大の活路ではなかろうか。

（黒尾武）

OCの総意でないことなどがあげられる。特に㈠の実現性は有望であると云う見方もあり、そうなれば、前途は明るいと云うことが云えよう。

この他、ハンドボール界自体の充実如何も、この問題の行方を大きく作用しよう。これは、JHAのみの問題にとどまらず、IHFとしても同ようである。

そのためにはJHAとしては、国内の充実をはかることはもとより、IHFとの連絡を、更に密接にし、ともかくも、オリンピック種目として、押しも、押されもせぬまでに成長するよう努力すべきであろう。むしろ、オリンピック種目として恒久化するには、前述のような希望的観測に頼ることなく、この問題こそ、最大にして、最良の道なのであるが、果して、「来年の五月」までと云う残された八ヶ月にどの程度の成果をあげるかは、これまた非常に大きな問題であろう。

ともあれ、日本のハンドボール界の総力をあげて、オリンピック種目としての実現に、最善の努力をすべき、最後のヤマ場を迎えた感が深い。

女子部門の採用否決

等五十七回IOC総会に、ソビエト連邦から提出された、ハンドボールを始めとする七種目（弓、射撃、ボート、自転車、バスケット・ボール）に女子部門を設ける提案は否決された。

「ハンドボール」（季刊）第三号目次

表紙写真はインカレ決勝芝工ー明大戦より、後半8分芝工大山田のパスを受けたRW佐藤、明大HB浜岡を抜いて強引なジャンプシュートを放つ一瞬

日本・ルーマニア 東日本シリーズ観戦記

小川励行（デイリースポーツ東京本社運動部）

六月十五日に来日したルーマニア・ハンドボールチーム（一九五七年度世界選手権準優勝）は既報六試合のあと、さらに北海道、仙台、横浜、東京で四試合を行い全日程を終了、十戦全勝、総得点二一六総失点九三と云う素晴らしい成績を残して七月五日午後十一時五十九分羽田発の日航機で離日した。本誌では前号に引きつづき後半四試合の〃東日本シリーズ〃の模様をおとどけしょう。なお今号の技術評は角度を変えてルーマニアのクンスト氏に日本チームを評して貰った。

第7戦

ル軍FW、妙技を披露

全北海道 前半風上の利活かせず

ルーマニアチームの来日第七戦対全北海道との試合は六月二十八日午後四時五分から函館市千代ケ岱球場で約七千の観衆を集め主審岡村昭二（教大OB）で開始。

○…風上に立った全北海道はベテラン、新鋭を集めたチームだけに大いにその先制が期待されたのだが、前半20分で10点差をつけられてしまっては、ル軍をあわてさせるにはほど遠かった。

○…スローオフのボールを大きなロングパスからオテリアに決められ先行された全北海道は1分30秒皆川がゴール前のFTを巧みにタイとしたあたりなかなか好調なスタートであった。ところが、この後、風上の利を使って懸命に攻め立てる全北海道のロングシュートが決まらず、先行のチャンスを失しているうちに、ルーマニアはようやく調子を出し始めウイング攻法に転じてコスタケ弟、ブルガルらが鮮かなミドルシュート、ロングシュートをピシピシ決め始め、完全に力の差を見せつけられてしまった。

ルーマニア 27（14—2, 13—5）7 全北海道

得	S	【ル軍】		【全北海道】	S	得
0	0	カベルプッシュ	GK	永山	0	0
0	0	バレスク	FB	宮崎	0	0
0	0	K・セラル	FB	泉	0	0
1	2	コバッシュ	HB	石切山	0	0
0	0	ニテスク	HB	田中	0	0
0	0	V・セラル	HB	三橋	0	0
5	7	コスタケ弟	FW	八重樫	4	0
2	4	オテリア	FW	正岡	5	1
6	9	ナデア	FW	皆川	21	5
4	6	コスタケ兄	FW	山本	1	1
8	12	ブルガル	FW	島津	2	0
0	0	レドル	GK補	石塚	0	0
1	2	バララッシュ	交代	国分	4	0
27	42	計		計	37	7

○…こうなっては、何時もの通りルーマニアの一方的なペース。北海道バックスを大きなフエイントやリターンパスでゆさぶってはなだれこむようなカットインで連続ゲットをあげた。全北海道も負けてはいず皆川を中心によくシュートを放つものカベルプッシュの長身を利したストッピングに阻まれて思うように挽回出来ない。時間の経過と共に脚力の差が表われて来てはもういけなかった。

○…後半ルーマニアはのびのびと戦かいゴール周辺でのピボットやリターンパススナップを利かしたスタンディングシュート飛び上りざま自在の方向に向けて射つ弾丸のようなシュートと彼らの妙技持味を活かして完全に試合のペースを握ってしまった。全北海道の後半はパス・プレーを多用してカットインプレーを見せ正岡、皆川のコンビがよい所を見せたが焼石に水後半も14点を失ってはとうてい太刀討ち出来るワケはなかった。

○…戦い終って皆川主将は「技術より力のチームだ」とルーマニアを評していたが、その通りでていねいにボールを廻しては切込む日本チームとは対照的に一見大ざっぱに見えるパスから空いたと見るや距離にかまわず叩き込む様なシュートの冴えは何時もながら力感にあふれた豪放なものであった。

会北海道評…イオン・クンスト（談）

北海道は前半いいロングシュートをみせたが後半体力的に消耗してチャンスを失っていた。後半ルーマニアはロング・パスを使ったがこれは相手チームの疲労を見込んでのことだ。しかし北海道はこれまでは対戦した他チームとくらべても劣ってはいない。（この項、北海道新聞より）

第8戦

雨中に鮮かなハンドリング

全仙台 問題とされず完敗

ルーマニアチームの来日第八戦対全仙台の試合は六月二十日午後四時から、仙台市宮城野原サッカー場で豪雨の中観衆約五千五百を集め主審I・クンスト氏（国際公認審判員・ルーマニア）で開始

ルーマニア 18（9―2／9―3）5 全仙台

【全仙台】		S	得
GK	石垣	0	0
FB	西巻	0	0
	石川	0	0
HB	佐川	0	0
	菅田	0	0
	橋森	0	0
FW	斉	0	0
	後藤	6	1
	森	6	3
	高橋	5	1
	藤井	2	0
GK補			
交代	村上	0	0
計		19	5

得	S	【ル　軍】	
0	0	レドル	GK
0	0	マルク	FB
2	2	K・セラル	FB
0	0	イリエスク	HB
0	0	ニテスク	HB
0	0	V・セラル	HB
4	5	コスタケ弟	FW
1	4	オテリア	FW
0	0	コバッシュ	FW
4	6	コスタケ兄	FW
7	12	ナト	FW
0	0	カベルプッシュ	GK補
0	0	ブルガル	交代
18	29	計	

○…試合開始ごろから降り出した雨に、グラウンドは軟弱を極め、最悪のコンディションであったが、ルーマニアはこの日も強力な攻撃陣で、甘い全仙台のディフェンス・ラインを抜きさり前半で勝負を決めた。

○…一方の全仙台は前半20分ごろまではよく食下り16分・20分には森が上手くルーマニアのディフェンス陣をくぐり抜けて2点をあげて4―2と迫り一応試合の興味をつながせた。しかし、このあとに見せたルーマニアFWの走力は、まるで晴天のグラウンドと同様で、得意のラッシュ攻撃はアッと云う間にスコアを9―2と引き放してしまい全仙台もこの攻撃で完全に気勢をそがれてしまい、攻め込んではパスをカットされ、守っては思うように振り廻された。

○…安全圏に入った後半のルーマニアは力を落として戦い、全仙台にもチャンスがあった。しかし、水たまりと泥ねいに足をとられて、動きがにぶく、ボールを廻すだけでシュートを打つチャンスが生めず点差は一方的に開くばかりであった。ルーマニアの秀れた個人プレーは相変らずのものであったが、晴・雨にかかわらずその正確なハンドリングは日本の及ぶところではなく、この大敗も仕方がなかった。全仙台はアト10分を残りしぼって23分、28分、29分と三点を返し、小学生を交えた豪雨の中のファンから拍手をあびたが、攻守にまとまりがなく、国際試合に出るにはお粗末な陣容だった。

オール仙台評　イオン・クンスト（談）

オール仙台は斗志はあったが、雨と云うことを考えないプレーが多かった。そのために我々から最少の得点しかあげられなかったがFWのコンビネーションはよささうだから、晴れていたならそのプレーも活きていたろう。

第9戦

全神奈川若さも及ばず

冴えるコスタケ、ナトの両W（ウイング）

ルーマニアチームの来日第九戦、対全神奈川との試合は七月二日午後四時十分から、横浜市三ッ沢競技場で約四千の観衆を集め、主審山田計氏（日体大OB）で開始

○…全神奈川の立上りは威勢がよかった。短躯のRH高久保がコスタケ弟を激しいアタックで尻持ちをつかせたり、若い青木、小野の両ウイングが鋭いカットインなどを見せたがこの善斗も分厚いカベの様なルーマニアの攻防陣には次第に通じなくなり、前半25分には早くも8―0と一方的にスコアを放されて勝負を決められてしまった。ルーマニアは主力のブルガル、ナデアをベンチに下げる余裕を見せていたのだし、全神奈川は若さが売り物だっただけに期待されたのだが、やはり変化に富んだルーマニアには若い馬力も通用しなかった。

ルーマニア 23（9―2／14―4）6 全神奈川

【全神奈川】		S	得
GK	宮下	0	0
FB	佐々木	0	0
	木本	2	1
HB	山岡	0	0
	井上	0	0
	高久保	0	0
FW	青木	9	1
	清水	3	1
	小川	4	1
	小野	8	2
	村田	1	0
GK補	山口	0	0
交代	本田	8	0
計		35	6

得	S	【ル　軍】	
0	0	カベルプッシュ	GK
2	3	バレスク	FB
1	2	K・セラル	FB
0	0	マルク	HB
0	0	ニテスク	HB
1	4	V・セラル	HB
5	7	コスタケ弟	FW
1	4	オテリア	FW
3	4	コバッシュ	FW
3	4	コスタケ兄	FW
5	12	ナト	FW
0	0	レドル	GK補
2	2	バララッシュ	交代
23	42	計	

○…後半全神奈川は攻守兼備の木本をFWにあげて挽回を計ったが、ルーマニアは全神奈川の甘いディフェンスをローリングオフェンでかき廻し、随所に強力なシュートを放って一方的に押しまくった。全神奈川はコンビネーションプレーが悪く、しかもFWはここぞと云う時にシュートミスを繰り返すなど賞められたものではなかった。

○…ルーマニアは、この日、特にコスタケ、ナトの両ウイングのプレーが冴えた。何時もFWのローリングに加はる両ウイングがこの日はウイングのゾーンから余り中に入らず、その代り両セラルとバレスクの三人が交互にFWのローティションに加わり、バックスの不自然さを感じさせないほどの鮮かなプレーを見せた。身についた六人攻撃、秀れた綜合戦力とでも云おうか。

○…これで地方選抜軍の対戦は全部終了したわけだが、やはりどのチームも寄せ集めの感じが強く、スケールの差と云ってしまえばそれまでだが力の入った試合やプレーが見られないのは〝技術以前〟の問題であり、攻守にバランスがとれてないことは、チームとしての形態を成していない。世界第二位の強豪チームに対してこうした非力なチームを向けると云うことは一考を要す問題である。やはり単独の大学チーム、あるいは地方チームにしてもその場合は桜丘会に他チームの選手を補強して編成した感じの全愛知のような方向を採り上げるべきだろう。

× × × ×

全芝工大、大魚を逸す

最終戦

七度び同点　ブルガルの決勝点に惜敗

ルーマニアチームの第十戦は七月三日午後一時から小石川グラウンドで昨年の全日本チャンピオンチーム全芝浦工大との間に、観衆約七千五百を集めて、主審岡村昭二（教大ＯＢ）、副審安藤、浅野三氏審判で開始

○…昨年、国内のあらゆる大会に優勝し、しかも昨夏以来30連勝を続け国内に文字通り無敵の王者として君臨する全芝浦工大が、この日まで九戦全勝、日本のチームから百九十九点を奪い圧勝を続けて来たルーマニアオールスターズに、果してどのような戦いぶりを示すか――ハンドボール界にとどまらず、梅雨あけのスポーツ界の注目を集めた一戦だけにスタンドはぎっしりとつまり、試合前から興奮を感じさせた。

○…全芝工大の策戦は高島監督の言を借りれば「前半少差でついて行き、後半あわよくば逆転。徹底的な六人攻撃、六人防禦を布く」と云うものであった。一方のルーマニアは日本のＮＯ１チームと云う相手だけに慎重。前日の試合ではブルガル、ナデアの主力をベンチに温存しており、最終戦とあってそのメンバーもベストメンバーを揃えて対戦した。

○…試合はルーマニアのスローオフで始った。何時もと変らないローリング気味のシュート力のコスタケ兄弟が巧みなリターンパスを交し40秒。兄が弟のアシストで鮮やかに一点を決めた。そのあと1分全芝工大は何時にない慎重なキープから機を見て佐藤が右サイドから左スミへバウンドシュート1対1の同点とした。まず強豪激突にふさわしい幕あきである。

○…前半11分まで試合は一進一退。8分15秒山田のシュートで始めて全芝工大は4−3とリードした。7分近藤のシュートがカバーに当ってはね返る不運は逆に再びルーマニアに反撃の糸口を与え4−4から5−4。13分ブルガルの糸を引くようなロングシュートは6−4とスコアを変え機を逃さぬルーマニアの連続ゲットに差を2点と開かれ、全芝工大はそれ以後10分間、この二点を追っての試合展開となった。

○…25分コスタケが秀れた個人プレーで満場からタメ息をつかせるシュートを決め、10−7と始めて三点差がついた。しかし、粘る全芝浦工大はこのあと25分30秒、宮原（俊）。29分15秒佐藤が左から中央のオープンに廻したボールで中央を割り9−10とつめよって前半を終った。この前、ルーマニアは珍しくもブルガル、ナデアが凡プレーを演じ、28分ブルガルの放った強シュートをＧＫ福本が好守した美技も見逃せない。

○…一点差で試合は再開された。同点とすべきスローオフボールを全芝工大はＣＨの田口が得点に結びつけた。「やれるぞ」全芝工大イレヴンの心が動いたに違いない。そのスキを1分ナト、3分ブルガルに決められた。12−10である。5分を過ぎる頃両軍ともエキサイトして来た。ルーマニアのバックスが珍しくもその長いリーチでパチパチと全芝工大のＦＷをハンドストップする。9分13−11から山田が決め12−13ここでルーマニアはナトがオーバーステップこの機を逃してならじと得意の速攻が全芝工大の六人の攻撃者の足を進ませる。10分30秒佐藤が右サイドぎりぎりからゴールを割って12−12。実に六度目のタイ・スコアである。

○…追いつかれると俄然走り出す、そんな感じのルーマニアはここでまた物すごい突進を見せ、11分のブルガルはアタックに来るディフエンスを引ずるようにしてシュートを放ち、13分のナデアは負じと大きなフェイントから単身切り込み、シュートに結びつけると云う旺盛な斗志を見せ、後半二度目の二点差となった。全芝工大のバックスも亦、必死の防禦である。しかしエキサイトのあまり14分ブルガルに14ｍ投が与えられた。ブルガルの大きなモーションからのシュートはよく福本とんでストップ。絶妙の美技である。

○…15分、ナデアが一点を追加16−13としたところでブルガルがベンチに引っ込んだ。約7分間得点のなかった全芝工大はここで再び速攻の猛烈な逆襲に転じた。その口火を17分当り屋の佐藤が快投し15−16。19分ルーマニアに久々のチャンスが訪れたが焦ったかナデアが強引なシュートを放ち無為、21分ブルガルの再登場となった。

○…両軍ともここが勝負どころであった。特にルーマニアは今までにない真剣さで、不必要なシュートは敵側にボールを与える結果になると云う不利を考えて慎重なローリング・オフエンスをとった。そのため、どうしてもルーマニアらしい豪快なＦＷ攻撃が影をひそめる。22分、遂に全芝工大の驚異

	【全芝工大】	S	得	【ル軍】	S	得
ルーマニア 17（10−9 / 7−7）16 全芝浦工大						
GK	福本	0	0	レドル	0	0
FB	尾藤	0	0	バレスク	0	0
	村上	0	0	K・セラル	0	0
HB	勝倉	0	0	マルク	1	0
	田口	1	1	ニテスク	0	0
	高井	2	1	V・セラル	0	0
FW	佐藤	11	8	コスタケ弟	4	2
	近藤	2	2	コスタケ兄	2	1
	山口	6	3	ナデア	6	3
	宮原藤	1	0	ナトル	7	5
	宮原俊	3	1	ブルガル	13	5
GK補		0	0	カベルプッシュ	0	0
交代	北村			コバッシュ	2	1
計		26	6		35	17

ルーマニア選抜軍戦いのあと

▽第一戦	19	4	全早大
▽第二戦	28	7	全中大
▽第三戦	18	11	全日体大
▽第四戦	24	11	全群馬
▽第五戦	23	15	全愛知
▽第六戦	19	11	全関学
▽第七戦	27	7	全北海道
▽第八戦	18	5	全仙台
▽第九戦	23	6	全神奈川
▽第十戦	17	16	全芝工大

的な粘りは攻撃に参加したHB高井が巧くFWのパス・ワークに入ってシュート16―16と七度目の同点となった。

○…慎重にボールを廻すルーマニアはかえって固くなったか25分ブルガル25分20秒ナデア27分ナトと三本続けてシュートを落とした。福本が美しく飛んで鮮やかなストップを見せていたのも見逃せないが、ルーマニアは〃最後の一点〃がどうにもモノにならない。

○…全芝工大もルーマニア同様焦りがあってパスが乱れ、これまた惜しいチャンスを逸すと云う攻防を展開し特に29分佐藤が中央からのシュートがバーを越えて失敗。勝負強いルーマニアが何でこの機を見逃そう。猛烈なダッシュから二・三度リターンパスでディフェンスを振って空いたブルガルに渡りスナップの利いたシュートはGK福本の左ヒザロを低くぬって飛んだ。タイムは20秒を残す29分40秒であった。

○…ルーマニアに連戦の疲労があったにせよ全芝工大の健斗は鮮やかであり、球史に残る立派なものであった。ここまでやれたことはあくまでFW、バックスのコンビネーションのよさが最大因であり、特にバックスのマンツウ・マンからゾーンへの切替の早さ、FWのスピードのあるゴール前のパスワークはルーマニアになんらそん色のないものである。

○…ただ、ここと云う勝負どころでFWに決め手を欠きリード出来なかったのは、結局は持てる力をフルに発揮しながらルーマニアの地力に押されたものであった。ともあれ、全芝工大の健斗は四年後の東京オリンピックに明るさをもたらした大きな意義を生み、大きな収獲を残してこの国際試合の全日程は二時二十分に閉幕す。

ルーマニア選抜軍個人成績（本誌調）

名	試	シ	得	反	位
A・ブルガル	9	88	55	5	FW
O・ナデア	7	48	26	3	FW
C・オテリア	5	19	8	4	FW
V・ナト	9	77	46	5	FW
A・バララッシュ	4	10	9	7	FW
M・コスタケ(兄)	9	33	21	11	FW
M・コスタケ(弟)	9	48	31	18	FW
V・セラル	9	8	3	19	B
K・セラル	9	7	4	27	B
O・ニテスク	9	1	1	31	B
Y・イリエスク	7	2	1	15	B
G・コバッシュ	9	14	7	21	B
S・バレスク	6	4	3	17	B
S・マルク	9	3	1	41	B
計	10	364	216	224	

（チームシュート率59,3%）

国際試合記録ノート

▽ルーマニアチームの一試合最多得点、第二戦対中大の28点、同最多失点は第十戦対芝工大の19点

▼最少得点差試合は第十戦の対芝工大―点

▽個人最高得点者はA・ブルガルの55点（9試合）なおルーマニアチームはGKを除いて全員得点を記録。一試合の最高はA・ブルガルの対全中大戦における13点

▼個人最多シュートはA・ブルガルの88本（9試合）

▽個人（FW）最高シュート率はM・コスタケ弟の64・6％（9試合48S31G）

▼個人（B）最多反則者はS・マルクの41（9試合）

▽日本チーム最多シュートチームは第五戦全愛知の44本

▼日本チーム最多得点者、全芝工大佐藤宏輔の8点（1試合）

▽日本側後半リードチーム第五戦全愛知の10―7なお前半リードチームなし

※　※　※　※

海外ハンドボール通信

×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×

先号当欄所報。六月十二日からアムステルダムで行われた世界女子十一人制選手権大会は予想通り、ルーマニアの優勝となった。各チームとも、国際経験豊かな強チームだけに、接戦が続いたが、王国ドイツに変って、オーストリアが決勝に進出したのは、特筆すべきことであった。ドイツは、第二次予選で、オーストリアをやや甘く見ていたようで、苦汁をのまされた。オーストリアは第一次予選でも一敗一引分と振わず、誰もが、ドイツを破るとは思っていなかっただけに、この試合の結果は、ヨーロッパの全ファンを驚たんさせたことだろう。ルーマニアは、四試合で三十一点を記したFWの強力が勝因で、どの試合も危気なかった。なお、参考までに、この大会の二次予選のカード（試合方法）を紹介すると、Aグループの一位対Bグループの二位、Bグループの一位対Aグループの二位の二試合で、両グループの三位同士は五位決定戦で顔を合わせるため、どのチームも、参加チームと一通り一回顔を合わせると云う巧い方法が採られている。成績次の通り

▽等一次予選・Aグループ

オーストリア 4（3—1 1—3）4 デンマーク

ルーマニア 6（3—0 3—0）2 オーストリア

ルーマニア 6（3—0 3—1）1 デンマーク

▽同・Bグループ

オランダ 5（4—1 1—1）2 ポーランド

ドイツ 7（3—0 4—4）4 ポーランド

ドイツ 6（4—2 2—1）3 オランダ

▽第二次予選

オーストリア 3（0—1 3—1）2 ドイツ

ルーマニア 9（4—1 5—3）4 オランダ

▽順位決定戦・優勝戦

ルーマニア 10（7—0 3—2）2 オーストリア

▽同・三、四位決定戦

ドイツ 3（3—1 0—0）1 オランダ

▽同・五・六位決定戦

デンマーク 6（3—3 3—0）3 ポーランド

ルーマニア軍、中国で2敗

▽日本遠征十試合に十連勝したルーマニアチームは、七月五日羽田発離日したが帰途中国を転戦、八試合を行ない6勝2敗の成績をあげ、七月二十五日中国を発った。

国際試合をかえりみて

～東京大会を中心とした技術評～

荒川清美

表題に対して、私は記録より見た試合の内容を記し愛好者の参考になればと、その一部分を紹介し、意見を述べることにします。

只前以て御断りしておかなければならないことは、この記録は東京で行われた2試合（芝浦工大、日体大）の記録であることを承知していただきたいのであります。

攻撃時間

攻撃時間とは相手方陣地（35米ライン）にボールが入った時に攻撃とみなし、攻撃終了は投射、もしくは相手のボールになった時をもって終了としたのである。

前半の攻撃時間

前半の日本の攻撃時間は9分53秒、これに対し、ルーマニアは13分26秒の攻撃をなしている。日本の9分53秒は前半攻撃時間の32・9%、ルーマニアは44・7%、1回の攻撃時間の最低は日本が13秒であるが、ルーマニアは7秒である。

最高攻撃時間は日本が63秒に対し、ルーマニアは250秒でどれもルーマニアは多くの時間をかけて攻撃をしていることは攻撃面の広さを物語るものと痛感するものである。

一回の攻撃平均時間が日本が36・7秒 に対しルーマニアは39・9 一回の攻撃時間にしても時間を費し確実なる攻撃を展開しているのである。

後半においては日本も、ルーマニアも攻撃時間は低下しているのであるが、日本は大体同じなのにくらべ、ルーマニアは2分程度の低下を見るのである。これは疲労によるものか、どうか、私としては判断に苦しむところであるが、日本における10試合とも後半においては確かに低下したのである。

後半における日本の攻撃時間は9・09 秒に対し、ルーマニアは11・09秒であった。

日本は後半攻撃時間の30・5%ルーマニアは37・1%、1回の攻撃平均時間は日本が25・5秒でルーマニアは35・1秒、日本の最低攻撃時間が10・4秒に対しルーマニアは165秒と、日本は前半にくらべて、非常に速くなったのに対してルーマニアは大体に同様なペースで攻撃をなしていることである。

後半における両国の攻撃時間の低下は疲労によることでもあるが前半にくらべ反則数が多くなり反則のために要した時間も見のがすことは出来ないのである。

前半において攻撃をしなかったが22・6%に対し後半は32・4%と前半よりも多くなっているのである。

前後半を通じて日本の攻撃時間が19・02秒試合全体の30・2%であるのに対し、ルーマニアの攻撃時間は24・35秒、試合全体の42・1%の攻撃をなしている。

日本、ルーマニアの攻撃時間を比較して見るとルーマニアは日本よりも11・9%、時間にして5・33秒、多く攻撃をなしているのである。両国の全試合における攻撃は72・8%、時間にして大体44分の攻防戦を展開し27・2%時間にして大体18分が攻撃をするまでに要したものである。前述した如く国内の試合においてはこのような攻防戦を見ることの出来ない、本当に満足すべき試合内容であると言うことが出来るのである。

攻撃回数　投射数　得点

日本は前半の攻撃時間9・53秒で18回の攻撃をなし、18回の攻撃で15本の投射をし得点が7点であった。

1回の攻撃平均時間36・7秒で投射平均時間が38・1秒、得点平均時間が1分24秒5であった。これに対し、ルーマニアの攻撃時間13・26秒で攻撃回数19回この攻撃で19本の投射をなし得点が10点1回の攻撃平均時間が41・5秒投射平均時間が41・5秒、得点平均時間が1分42秒2の率である。

後半日本の攻撃時間9・90秒で22回の攻撃をなしこの攻撃で投射したのが14本得点が7点、1回の攻撃平均時間二五・〇五秒投射平均時間が42・1秒で得点平均時間が1分24秒5であったのに対して、ルーマニアの攻撃時間は11分09秒攻撃回数が19回投射数が16本で得点が7点であり、1回の攻撃平均時間が35・1秒投射平均時間が41秒得点平均時間が1分35秒5である。

前後半の記録をまとめて見ると次の如くになる。

日本の攻撃時間19・47秒
攻撃回数　40回
投射数　29本
得点　1点

ルーマニア
攻撃時間　24・35秒
攻撃回数　38回
投射数　35.本
得点　17点

以上により見ると日本は攻撃時間が少ないのにかかわらず攻撃回数が多くそして投射数が少ないのである。これは体格体力の差に依る攻撃の方法が異なり、攻撃面の大少がここに現われているものと想われるのである。

又得点の確率にしても日本は45・7%に対しルーマニアは49・2%であるが、ルーマニアは攻撃回数と投射数が非常に接近している

のに反し、日本は攻撃することが必ず投射に結びついていないことは、今後研究されなければならない問題である。

ルーマニアの得点確率は芝工大を除いて50％以上であったが対芝工大の後半が悪かったため49・2％に終った。以外の9試合は全部50％を越しているのである。

ルーマニア監督で国際審判員であるイオンクンストは、日本の技術について指摘したことは、ロングシュートをなぜしない、得点が少ないのはロングシュートがないからではないかとしばしば指摘していたが、今後日本はこのロングシュートを生かす方法を講じた練習をなし試合にこれを生かさなければ投射数も又得点の確率もよくならない。国際試合においては到底勝利を得ることは困難であることを痛感したのである。

得点経過について

この得点経過については日本とルーマニアは全く逆な経過を示しているのである。ルーマニアは前半の中に60％の得点を取るのに対し日本は51％後半においてはルーマニアが40％に対して日本は49％と日本は後半に前半を補なっていることであり、ルーマニアよりも％は高いのである。

又日本は前半の中でも非常に高低があり日本の一番最低の時間にルーマニアは最高の得点をなしていることである。

東京で行われた4試合（早大、中大、日体大、芝工大）の得点平均を見れば明確になると想われるので次にかかげることにする。

この得点経過は5分間隔で取ったものであるが参考にして頂き度い。

	日本	ルーマニア
（前半）		
1分から5分まで	1点	1・4点
5分〃10〃	1点	1・4点
10〃15〃	0・5点	2・3点
15〃20〃	0・7点	2・8点
20〃25〃	1・3点	2点
25〃30〃	0・[illegible]点	2・4点
（後半）		
30〃35〃	0・4点	2点
35〃40〃	1点	0・4点
40〃45〃	0・8点	1・8点
45〃50〃	0・8点	1・3点
50〃55〃	0・8点	1点
55〃60〃	0・8点	1・4点

以上より見るに日本の最低は前半の10分頃より20分頃までであるのに対しルーマニア日本の最低時間中に最高の得点をなしていることである。

ルーマニアとしてはこの前半の10分から約15分間に試合の勝負を決すべき策戦であったかどうかは、わからなかったが、今試合がこの10分間に左右されたと云っても差しつかえないのである。この得点経過は国内の試合においても全く同じ経過を示しているので体力の配分化は充分なる研究をしなければならないことである。

試合前の準備運動においてもルーマニアは軽いパス投射等を行い10分位で済ましてしまうのであるが、日本は約一時間位い準備運動をなして試合にのぞむのであるがこの準備運動についても一考を要する問題である。

又日本の10分頃より得点の経過が低下し最悪の状態になることはセコンドウインドに入っていたのではないか、セコンドウインド発現と独走速度の関係によると走行距離三〇〇〇米を越えるランニングにおいては6分位でセコンドウィンドに入ると杉本先生は言って居られる。（オリンピアNo1による）

勿論ハンドボール競技はランニングと同一視することは出来ないが、種々なる条件から10分前後に入るのではないかと思考されるのである。ために今後はこのセコンドウィンドをどこにおくべきか、又試合中には全然なくすには如何なる方法を講じたらよいかがこの問題を早急に解決しなければならないことを痛感したのである。最後に審判と反則の関連性について意見を述べて見よう。国内の試合においては一試合を通じて反則数が大体40を数えない試合はめずらしいのであり、強いチームになればなる程反則数が増している現状である。これにくらべルーマニアのは一試合20の反則を犯した試合は少なく、一試合の反則数が11、しかなかった試合もあったのである。これは日本の審判の判定がおかしいのではないかと断定をするものではないが、反省させられるものである。

今般の対ルーマニア戦においてイオンクンスト国際審判員が審判したのが対関学戦のみでこの一戦を見てすべてを断定することは早計ではあると想うが、この一戦において三名の退場者を判定したのであります。等れも防禦側になされ、二名が日本で一名がルーマニアの選手で、等れも投射の際に相手に対して、からみ付いたので適用されたものであった。

日本であるなら、審判によってフリスローにもなり14米スローにもなる違反行為であったが、彼は「ちゅうちょ」することなく退場を命じたのである。

国内の試合においてはしばしば14米スローをとられても相手を阻止するのだ等とよくきく言葉であるが、14米スローを取られてもこれが必ず得点には結び付かないので、反則をしなければ、損をすると言う選手がかような状況より育だてられるのである。

審判は規則に定められた判決は適格に適用すべきである。と考え日本においてはもっと退場を適用すべきでない、判定をなすべきでこの適用によって反則数も減り技術の向上があるのではないかと痛感したものである。

IOCだより

九月十一日ローマ発の共同によると東京オリンピック組織委員会の田畑事務総長は内外記者団約三十人の質問に応えた中で、「私の考えでは種目整理は東京大会以後のことで、東京では全種目行うつもりだ。この点競技の上では史上最高となると思う」と語っている。

さて、こうした問題点に立って、今後の日本の採るべき道について、大阪ハンドボール協会長馬場太郎氏は『協会としては、残された期間にヨーロッパ各国と充分な連絡をとり、これら諸国の強力なバックアップを要求すべきであろう。また、国内においては国際交流を頻繁に行うべきで、さしむき、韓国への啓蒙と、中共、ソ連の国際機合などを計画して、アジアハンドボール界の基礎を確立することも必要だと思う。』と云っている。

"豪快"と"スピード"の混合（ミックス）

～秀れた体力と基礎技術が基底～

群馬大会責任者　町田歳雄

ルーマニア対全群馬の国際試合は六月二十二日、桐生市営新川球場に於て約一万三千の大観衆を集めて極めて盛大裡に挙行された。此の二十二日は折悪しくストの為交通機関が全面的にマヒする事が予想されて居たのでルーマニア選手団は東京からバスではるばる来桐することになっていた。然しバスの輸送ということになると途中事故でも起きたら如何ともなし難いので只々事故のない事を祈っていた。所が皮肉なことには此の心配が事実となって現われた。選手団が出発後に於て「事故の為桐生到着の時間が予定より若干遅れる」という途中からの連絡があった。ここに於て前座戦として県内高校東西対抗を十二時から実施することになって居ったのを二十分遅らせて穴を埋めることとしルーマニア選手の来場があまり遅れることのない事を期待しつつ、ひたすら待っていた。然し実際には彼等が万雷の如き拍手の波に迎えられて試合場へ姿を現わしたのは我々が予想した時間よりは早く高校生の試合終了直前であった。国際戦は二時より開始する予定になって居たが定刻までには四十分位しかなかったので、不可抗力の為遅れた事でもあり亦彼等の練習の時間等も考慮して吾々としては試合時間を十分位遅らせて二時十分より試合を行うよう交渉した所逆に「予定通り試合を開始する」との回答があった。自己が不利の状況であるにも拘らず、あくまで約束を実行し、時間を厳守するこの心意気、真のスポーツマンシップの一端を現実に見せられてまことに感銘深いものがあった。

2　準備運動と練習

試合場に於ける彼等の準備運動及練習は日本選手のそれと比較した場合極めて簡単で然も各人各様個性に適した、コンディションに応じたものであるように見受けられた。亦全身がよくリラックスされて居り最小の力で最大の効果をあげている事は大いに吾々として学ぶべきものがある。

3　試　合

彼等の豪快にしてスピーディな試合振り、勝れた体力、傑出した基礎技術、確実極まりないシュート、等々全群馬チームと比較してあまりにもその差が大である事を見て只々驚嘆あるのみ。

実際試合に於て個々に劣って居るチームが個人プレーで彼等バックの壁に当って行っても突破する事は到底不可能の事であり、コンビとスピードによる攻撃が出来なかった事が大敗した原因であろう。尚細部に亘っての技術的、作戦的なことについては斯道の大家が夫々あらゆる機関紙にものべられて居るので省略することとしてここに特筆したいのはシュートの確実さである。彼等が約六割九分のシュート率を示して居るのに全群馬は僅か三割三分の得点率である。強肩を利用したロングシュート、すばらしいジャンプを生かしてのジャンプシュート、手首の力をよく生かしゴールキーパーのタイミングを外しての適時適切なシュート等々ほんとに参考になるものが多々あった。

※　※　※　※

陽気で真面目な私生活

～和やかに国際親善の役果す～

全仙台主将　森　恭一

台風の為さんざん気をもませたルーマニアが六月二十九日仙台にやって来た。長途の旅でかなり疲労の色が見え、そろいのブレザーコートも多分によれよれになっていた。期日の変更（全早大、全北海道に同情す）で運営上大混乱をしていた矢先だけに駅でブルガルと握手を交わして初めて試合が出来るんだなぁーと云う実感が湧いた。仙台では遠来の珍客を迎えるにあたり二泊するだけに第一に考えた事はよいお宿を割当て旅情を慰めようと予定した。そこで六月早々開業のホテルを予約した。このホテルは全国十指に入る一流で恐らく転戦中での一二を争ったことと思っている。仙台に招いたからにはやはり松島を観てもらわねばと思い日本三景なる事を教え貸切船で八百八嶋を案内した。途中是非泳ぎたいと云い出したのには当惑した。明日のゲームをひかえ泳ぐ等理解に苦しむところだがその理由が面白い、太平洋に入りたいと云うのだ。松島もその一部である旨説明すると喜び勇み半数が泳いだ。聞くところによると日程変更で日本に来て始めての自由時間であり見物だったらしく本当に楽しそうだった。

夜メンバー交換の為ホテルに行ったら役員が渋い顔、食事が不満だったらしい。宿舎については自負していただけに心外であり、よく話合ったら試合に来ている以上十分な食事が与えられなければ満足すべきプレーは出来ないと云うのだ。又このホテルはあまり立派だから宿泊費も高いのだろう、もっと安い所で結構だからそれだけ食べさしてくれと幾通りの献立を書く仕末である。まさに腹がへっては戦が出来ないで同感だが日本式に考えれば客の立場であり乍らちょいと図々しい。でも人間食べ物で争うのは最低で希望通りのメニューでＯＫしたらニッコリ恐れ入りました。それにしても各会場ともこの苦情は同様だったとか、今後国際ゲームを開くにあたり十

分検討すべき大きな問題ではなかろうか。試合日の卅日は午前迄晴天だったが天気祭りのかいなく開会式直前より降雨となり試合はどしゃ降りのどろんこ試合となった従ってルーマニア真随のプレーに接しえず残念だった。あまりの雨で連中も悲鳴をあげていたが、常にボディーキャッチを実行していたのには感服した。技術面では別に学ぶ点がなく、一言にして六人攻撃、六人防禦を教えてくれた卅五米の設定により日本側も得点は可能であり、要するに六人でのディフェンスを工夫すれば今後期待がもてる事だろう。

試合後互いにその健斗を讃え合ったがすぐに大笑いとなった。あまりにも泥だらけになり身長の差がなければ見分けがつかなかったことだろう。ただちにグラウンド内の浴室に両チーム一緒に飛び込んだ。そして国籍を越え体を流し合う姿はスポーツでしか成しえない美徳ではなかろうか。事実湯舟の中でも連中とは大人と子供と云った感んじで、頑健な体は見事だった。手を合わせてみたが指だけで五、六センチは違っていた。

歓迎レセプションは同夜ホテルで催されビールの乾杯が続いた。ほどよくまわった折り民謡王国に恥じないよう全仙台で民謡の数々をやってのけた。ルーマニアも意外に好調で美しいハーモニーを聞かせてくれた。カチューシャにいたり両国合唱となり盛況のうちに終幕した。これから日本も海外遠征をする事だろうが親善の目的を果す意味に於いても、チーム自体が芸を持って行くべきだろう。

翌朝、ルーマニアを見送りに行き発つ前世界No1GKカンペアーヌと片言語で話合った。東京オリンピックに来てくれと云ったら指を折りもう才だから駄目だと云う。そしてコスタケ弟等若い連中を呼び寄せ再会を約束させた。なにかしらその時のカンペアーヌの物寂しい姿を今も想い起す。

（日体大ＯＢ）

ファーム組織の拡大強化を
――戦い終って痛感すること――

全仙台監督　福島富造

他の種目よりもハンドボール競技は「投」と「走」が端的に表われるものであり、特に人間的技のスポーツなので、それだけ選手選択になやむが、短期間で大きく飛躍するためにはまず第一にその素材であるプレーヤーの体格が人並み以上にすぐれていなければならない。つまり絶対的に強じんでありたい。その強じんな素材をハンドボールの社会の中で完成させること、それが第二の主要点である。ここにファーム組織の拡大強化が当然考えられる。ハンドボール界は今やプレイヤー・ファンの増加にうき身をやつしているこの状態では四年後の東京オリンピックに於てよい成績をあげることはできないであろう。今回の対ルーマニア戦における日本チームでも、まだ私が関係した全仙台チーム以上の見方からすれば今後に考慮のよちが残されたが、でも、特に全仙台は初めての国際試合でもあり親善をもかねて編成したので完敗した。来る機会には高校、大学生よりの大型チームで徹底的に速攻法で望む心算である。終りに国際試合によって得られる利点はいうまでもなく、国民全般のハンドボールへの関心がたかまるとともにハンドボール人口がふえて行くことを切に望んで止まない。（日体大ＯＢ）

六人攻撃と六人防禦
～力感溢れるルーマニアの基本戦法～

名古屋大会委員長　栗脇嶷

先般来日した西独チームと、今回来日したルーマニアチームとは共に世界の一、二を競う強豪らしく、華麗と思われる西独、力感溢れるルーマニアと与えられた印象は異なったものがあるけれども、共に類似点も多いが特に印象ずけられたのを二つのべてみる。

（1）シュート

試合をみていると、GKが普通ではとれる範囲にくるボールに対しても、おそすぎたり、手に触れても押されてゴール・インするために、ボールをとるタイミングを狂わされ、惨々な目にあっている様に見受けられた。勿論、日本に於て、ロング・シュートをする人がいない訳でもないが、彼等は殆んどがフリー・スロー・ライン周辺より投げるロング・シューターであり、ゴール・エリア・ライン一杯まで突込んでシュートをすることが少く、然もそのボールの速さ、力強さは我々のよく行うジャンプ・シュートするボールとちがわないが、或はそれ以上と感じられ、之が大きな点差となって現われたと思われる。尚ルーマニアの監督が、〃我々は1kg～1・5kg位のボールでシュート力を養う〃とか〃エキスパンダー等で訓練する〃と言っていたが、向上の方法として、之等の補助的なものも考えてみる必要があると思う。

（2）攻防戦

先般の西独チームとの場合はオフ・サイドの規則のない時だったので、彼等は全員防禦の方法によって作戦をたてていたが、今回は六人の制限というルール改正上の要点を全面的に採用していた。我々も理論上では一応検討もし、出来れば実施すべきだ、とは考えていたが、前後半合せて六〇分間、彼等によって延々と繰返された六人の攻撃防禦をみて、体力的に劣った我々にはとてもむりだと一時は考えたが最終戦で芝工大が一応六人による攻防を展開した事は前途に明るさをもたらしといえよう。

第12回全日本総合選手権総観戦記

（昭和35年8月11日～14日・於秋田県）

………東北で始めて行われた全日本総合選手権。いくつかの成果を残し男子は芝浦工大………
………が堂々の２連覇を遂げ無敵ぶりを、いかんなく発揮すれば女子は愛知紡績が史上………
………初の４連覇を飾って終幕した…………

芝浦工大堂々の二連覇

男子

男子の部（第十二回）は八月十日から十四日までの五日間、秋田県大曲市で、二十三チーム（棄権一）を集めて行われた。第八回（昭31）以来四年ぶりにエントリーしていた全関学（兵庫）が棄権したのは淋しかったが、熱戦があいつぎ盛況だった。なお、会期中、風雨が多くグラウンド条件はあまりよくなかった。

▽一回戦

全立教（東京）16（5―8, 11―7）15 住友化学 菊本

実業団チームでは、古顔になった住友は、前半好調に得点をあげ、出場三年目にして宿望の今大会初勝利をあげるかに見えたが、後半体力のある全立大にじりじりと差をつめられ逆転負けを喫した。

全法政（東京）16（5―9, 11―6）15 関西日体ク（大阪）

一回戦屈指の好カード。若い現役の充実で注目された全法大は出足が揃わず、ベテランを集めた関西日体クの老巧さに先手をとられ苦しい試合ぶりだったが、後半よく粘りを発揮して失点を回復、鮮かなサヨナラ勝ちを遂げた。

桜丘会（愛知）15（11―4, 4―7）11 日体大（東京）

前半に見せた桜丘会の速攻は優勝候補にふさわしく、後半、日体大に追われたが、前半で得た余裕にモノを云わせて制勝した。日体大は前半攻撃が雑に流れたのが大きい。

全教大（東京）21（9―6, 12―9）15 桐生ク（群馬）

試合運びの巧拙が勝負を決めた。桐生のFWは決して悪い出来ではなかったが、全教大はFWがよく走り勝機を巧みにとらえて桐生クの守備陣をゆさぶって得点していた。

東北学院大（宮城）12（5―4, 7―1）5 寝屋川ク（大阪）

寝屋川がどんな試合を見せるか興味があったが、前半の善戦が精一杯。後半は東北学院大が大学チームの貫録を示し押し切った。

京都ク（京都）11（4―2, 7―1）3 明治大（東京）

同大、京大、立命大と京都三大学の現役選手を要所に配した京都クと主力を全明大に注いだ明大とでは攻守にかなり差があり、京都クの順当な勝利となった。

山陽ク（広島）　不戦勝　全関学（兵庫）

▽二回戦

芝浦工大（東京）24（14―3, 10―4）7 全立教（東京）

芝工大は攻守に自信満々で、徹底した六人攻撃で全立大につけいるスキを与えなかった。

白亜ク（岩手）11（4―2, 3―5, 3―0, 1―0）7 全法政（東京）

白亜クの健斗が讃えられる一戦であった。白亜クの母体となっている盛岡一高は関東学生リーグで活躍している選手も多く、国体などにも古くから登場している古豪だが、まさか上り坂の全法政を食うとは思わなかった。地元東北のために万丈の気を吐いたと云えよう全法政は前半、二点しか得点をあげえなかった攻撃力の不振が痛く後半、奮起して延長にもつれこましたものの、延長後は、スタミナを無くして、白亜クに再びペースを取戻されよい所がなかった。

法政大（東京）21（12―1, 9―1）2 大曲高（秋田）

大曲高は地元の声援をあびての出場だったが相手が悪かった。今秋の関東リーグでも惑星視されている法大はゆうゆう前半で勝負を決め楽勝した。

桜丘会（愛知）22（9―6, 13―6）12 明星ク（東京）

グラウンドコンディションにわざわいされたか桜丘会の出足は日頃の鋭さがなかったが、次第に地力を発揮し、貫録を示した。明星クはよく食い下ったが、これといった決め手がなかった。

大崎電気（東京）13（6―6, 7―4）10 全教大（東京）

新星大崎電気の中央初登場で、興味を呼ぶ一戦だった。大崎の試合運びは好調とは云えず、一方全教大は流石に名門らしい気力のある攻守でよく大崎陣内に攻め込み好内容の一戦になった。互角の戦況から後半に入ったが大崎は個々の秀れた突進力が次第に冴えはじめ僅かに優勢を保ち乍ら勝利をものにした。全教大の健斗もあったが、大崎のチームプレーは未だしの感がある。

全明大（東京）22（8―2, 14―4）6 山陽ク（広島）

全日本学生二位の現役に浅野兄を加えた全明大はFWが速、遅攻を使い分けて山陽クを自分のペースに引込み順当な勝利を得た。山陽クは、最初から引き放されてしまっては、この結果も致し方なかった。

滴水会（東京）13（5―3, 8―4）7 東北学院大（宮城）

東北学院大の真価を問う一戦だったが、前半の健斗はなかなか見事で、滴水会も苦しい場面がしばしばあった。しかし、後半に入ると綜合戦力の差が表われ始め、時間の経過とともに点差が開いていった。東北学院大としては実力一杯、善斗であった。

全日体大（東京）6（1―2, 5―3）5 京都ク（京都）

京都クが黒馬ぶりを発揮したので、俄然面白い試合となった。前夜の雨でドロ沼のようになったグ

ラウンドは遅攻に長けた京都クには、おあつらえムキで、前半は両軍併せて三点と云う貧攻戦だった。しかし、後半、全日体大はつかんだチャンスを慎重に攻撃し、粘りつく京都クを、やっとの思いで振り切り辛勝した。それにしても、前半に見せた京都の徹底した遅攻は試合時間の大半をマイ・ボールにすると云う老かいさで、全日体大が京都陣に攻め込んだのは僅かに六回。どうしようもないと云ったカッコウであった。

▽準々決勝

芝浦工大 11（5—0、6—4）4 白亜ク

前日、全法政を破って意気上る白亜クであったが、走力が一段も二段も違っては、後半の6—4と云う善戦がせめてもの慰めであった。芝浦は、相変らず、よく走り、ゴール前でもぬかるみを気にしないパス・アンド・ランは全く鮮やか。

桜丘会 9（4—5、5—3）8 全明大

全明大が、先手、先手を打ったので面白いゲームとなった。桜丘会は得意のラッシュ攻法を足場の悪さに止められて、シャープな動きがなく、後半なかばまでは、全明大にがっちりと試合のペースを握られていた。しかし6—6のタイ・スコアに持込んでからは、ようやく気分的にも余裕が出たか、逆に先手をとったあたりは浅野、牧野、服部らベテランを擁したFWらしい攻めっぷりであった。全明大は、桜丘会に若さでは勝り乍ら、得意のスイッチ攻撃が活きず浅野兄、正岡らのポイントゲッターが足を封じられては仕方がなかった。両軍ともに悪戦苦斗で気の毒なコンディションだった。

大崎電気 11（5—5、6—3）8 滴水会

大崎は本来のメンバーに黒沢、高森（共に芝工大OB）が補強されて芝浦OBの感があれば、滴水会も近藤を先頭にした芝浦のクラブチーム。お互いに相手を知りつくしての対戦だった。前半は一進一退の互角の戦況だったが、後半になると大崎FWの地力が次第に発揮されたのに反し、滴水会の動きが鈍くなり、その差がスコアになった。大崎は後半パスワークが比較的よかったのが勝因だが、メンバーからすれば会心の出来ではなかった。練習不充分と云う実業団チームのもつ悩みの表われであろうか。

全日体大 12（5—3、7—2）5 法大

大曲高戦でシュート率七割と云う快攻を示した法大FWはこの日も、全日体大にまっ正面から激しくぶつかり、前半はなかなか見応えのあるゲームだった。しかし、後半に入ると全日体大の手固いマン・ツウ・マンディフェンスを攻めあぐんで出足が止まり、時間とともにスコアを放された。全日体大はFWは現役中心、バックスはOBの巧者を配して巧みのある攻防を見せたのは流石である。

▽準決勝

芝浦工大 20（10—1、10—6）7 桜丘会

	【桜丘会】	【芝工大】
GK	金原	福本
FB	宇津野	尾藤
	伊藤	村上
HB	角井	勝倉
	斉藤	田口
	横井	武井
FW	服部	佐藤
	牧野	北村
	浅野	山田
	稲熊	金山
	高村	塩川
GK交代	豊島	鷹見
	長田	越智
	ST30反則25	ST30反則38

「芝工大の攻めるコートは雨が降っていないみたいだナ」と観衆からささやかれるほど、泥沼のようなグラウンドを走り廻る芝工大FWのクイックプレーは鮮やかであった。芝工大の連勝記録をストップさせる最大のホープとされていた桜丘会も、その速攻が一こうさえず、もたつきの目立つ攻撃ぶりであった。芝浦FWは短いパスが面白いように決まり、桜丘会バックスはゆさぶられ通し、予想外の一方的経過となった。桜丘会は、後半LW高村のシュート力に頼ったが、前半の失地回復はとうてい無理であった。芝浦は七点をあげたRW佐藤、五点をあげたCF山田の好技が一際光ったが、六人攻撃の完成に一役買うHB陣の大きな成長も見逃せず、GK福本も、再三の美技を見せ、攻守に無敵ぶりを発揮した。

大崎電気 12（5—4、2—3、1—0、4—1）8 全日体大

新しき巨豪、大崎電気は延長の末、全日体大を降し、初出場で決勝進出を遂げた。ゲームは一点を争うせり合いとなり、大崎は宮原俊、竹野の両ウイング、全日体大もLW井上とウイングがポイントをあげ、見た目にも面白い試合になった。前半一点をリードされた全日体は後半連続三点をあげ7—5と開いて、そのままペースを握るかに見えたが大崎は21分、28分に得点をあげ追いつき、延長戦に入った。延長に入ってからは、再度、攻守所を変え、大崎は前半2分竹野がクリーン・シュートを決めて8—7と優位に立ち、延長の後半は動きの鈍った全日体大は、延長前、アヘッドしていながら、やや



準決勝・日体大FW井上（右端）シュートするも左にきれる．手前は大崎電気のGK今野

勝ちを焦ったような試合ぶりで凡シュートや無用のファールが多く28分の失点は、14M投から同点に

	【全日体】	【大崎】
GK	福田	今野
FB	松田	高森
	久保田	高橋
HB	渡辺	村上
	東	黒沢
	清川	高井
FW	青木	宮原俊
	山下	中山
	川上	宮原藤
	栗山	井上
	井上	竹野
GK補	北川	五十嵐
交代	北山	
	ST32 反則39	ST30 反則49

されたものだった。全日体大が決勝戦に出場しないのは大会始って以来であり、大崎の健斗が光る一戦であった。

▽三位決定戦

全日体大18（11—5, 7—6）11桜丘会

	【全日体】	【桜丘会】
GK	福田	金厚
FB	渡辺	宇津野
	久保田	伊藤
HB	松田	角井
	蓮井	横井
	東	豊島
FW	青木	長田
	山下	牧野
	河上	稲熊
	栗山	服部
	井上	高村
GK補	北川	浅野
交代	北山	
	ST28 反則33	ST21 反則21

桜丘会は疲労の色が濃くチームプレーも鋭さがなくわずかに稲熊高村の突進力で得点をあげていた。全日体大は攻、守に手固くFWもムラなく得点を記るし、タテの突っこみもよくFWの差を表わして制勝した。

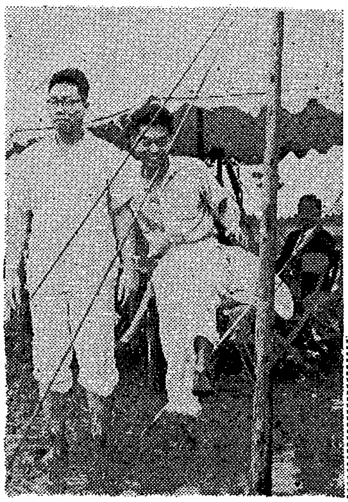
▽決勝戦

芝浦工大13（7—3, 1—5, 3—1, 2—1）10大崎電気

	【大崎】	【芝大】
GK	今野	福本
FB	高森	尾藤
	高橋	村上
HB	村上	勝倉
	黒沢	田口
	高井	武井
FW	宮原俊	佐藤
	中山	北村
	宮原藤	山田
	井上	金山
	竹野	塩川
GK補	五十嵐	鷹見
交代		越智
	ST31 反則37	ST28 反則29

観戦記

○…芝浦は初出場の大崎電気に苦戦した。延長戦になってRW佐藤の活躍で大崎電気の追撃を退けて2連勝。昨年の七月の全日本学生選手権で同志社大を破ってから38連勝をマークした。佐藤はそれまで1点もあげていなかった。延長前半1分にまずRI北村ゴールでリード、3分佐藤が14メートルスローしてから調子を取りもどし9分にもゴールして3—0、延長後半2分、4分と佐藤が連続4点をたたき出した。芝浦は前半北村がよく走って7—3とリードしたが、このとき〝大崎には勝てる〟という安心感があったのではないか、後半FWの動きは全くみられず10分金山のシュートで1点をあげただけ。大崎は見違えるようなスピードを出し宮原（藤）、宮原（俊）がチャンスメーカーとなり竹野をうまく生かして26分8—8とタイスコアにした。この間芝浦は後半4分に金山が、タイムアップ寸前に山田がいずれも14メートルスローを失敗している。これさえ決まっていれば苦戦せずにすんでいたところだ。どうも芝浦の14メートルスローはヘタクソだ。それに芝浦FWは後半疲れが出て走れなかったのが苦戦の大きな因。前半、あるいは後半で佐藤を使っていたら楽勝できたところだ。ベテランぞろいの大崎はさすが宮原（俊）のスピードは芝浦の若手も舌を巻いていた。カモシカの如きスピード。GKの今野のカンのよさ。堅いマン・ツー・マン・デフェンス。芝浦は攻撃、守備において大崎を見習う点が多い。芝浦GKの福本は対ルーマニア戦を契機に長足の進歩。あまり神経質なのが欠点。



素足姿で取材中の鷲尾、牛木記者

大曲だより

⑪…大曲会場はドロンコ。板谷市長は低姿勢に人に会うごとに頭を下げていた。「協会の人も選手もよくやってくれました。感謝しています。来年の国体までにはすばらしいグラウンドにしておきます。」

⑪…ハンドボール協会の役員があまりにもジェントル・マンなので秋田県の人がおどろいている。ドロンコ会場ならばだれでも文句をいうが、高島理事長ら協会役員は文句ひとついわない。式場会長もぬかる道を役員にオンブしてもらって席につき、長靴をはいて観戦。旅館でも文句もいわず、式場会長、高島理事長ら役員が一緒に食事をとる、酒も飲まずきわめて簡単。「こんなジェントル・マンはいままで見たことがない」と秋田県や大曲市の職員がほめていた。

⑪…ことしは国体を前にして各競技の全国大会。東北大会。インターハイ。五輪最終予選をやったが、そのときは不平不満が続出し地元は困り抜いていた。〝酒を出せ〟とか悪質なのは〝女を世話しろ〟とかおよそスポーツマンらしからぬ行為があった。その直後にハンドボールが乗り込み、紳士的な態度でいたから地元がおどろくのも無理のない話。これでハンドボールの株は一気に上がった。

⑪…東京からわたしと読売の牛木記者が出かけて行った。さっきもいったようにドロンコ会場。東京並みの服装ではトテもだめなのでレフェリのパンツやトレーニングパンツを借りた。…旅館からゲタを借りて会場へ……。ゲタなんか全然役に立たず。とうとう二人ともハダシでグラウンドを走り回った。東京ではちょっと想像もできない。トレーニングパンツをヒザまでまくし上げ、前にかがむと田植え姿にそっくり。「こんな取材は生れて始めて。久しぶりにハダシになったがいい気持ちだね。いい想い出だ」と二人で笑った。来年の国体までにはすばらしいグラウンドになるという話だが、ちょっと惜しいような気もする。

⑪…湯沢から大曲へ帰ってきた役員からきいた話。湯沢の市長さんや助役さんが大変熱心な人で大会が終ったらすぐグラウンドの整地にとりかかるとか。ことに助役さんはハンドボール・ファンになり、市の職員を動員してグラウンドの手入れから会場の世話までやってくれたそうだ。『湯沢や大曲で国体ハンドボールが開催できるのはほんとうによかった』というのが協会の本音。（鷲尾武治）

●…名古屋はさすがにハンドボール王国。桜台高の稲石先生はハンドボールの虫。それに愛知県協会の栗脇先生が骨惜しみせず、下働き。中京商、桜台高、半田高、愛知紡績、名前をきいただけでゾーッとした。

愛知紡績、四連覇飾る

女子



女子の部（第十二回、うち中止一回）は八月十日から十二日までの三日間、秋田県湯沢市で、十一チームを集めて行われた。

東西のビッグチームが、ほとんど顔を揃え、面白い試合が多かったが、愛知紡、熊本、寝屋川、日体大、水海道らのA級チームとB級チームの差は相変らずつまっていないようだ。

▽一回戦

寝屋川ク（大阪）8（3—1 5—0）1 富士宮東高（静岡）

女子高校界の名門寝屋川は、今年のインターハイでは予選で敗れているだけにこの大会への意気ごみは素晴らしく、富士宮東高を相手に最初から圧倒の攻守を見せた。富士宮はプレーが若く前半の一点のみに留った。

熊本商大（熊本）28（13—2 15—0）2 全岩井高ク（茨城）

熊本は流石に強く、全岩井はなす術がないままに一方的な経過をたどった。なお、熊本のあげた28点は、昭和二十五年の第一回大会以来、最多得点（女子）レコードであり、26点差も大会新記録である。

清水女商（静岡）7（2—0 5—1）1 六郷高（秋田）

六郷高はインターハイから戻ったばかりで疲れが抜け切らないか前半、先行された二点差をどうしても返せず、後半は清水女商のパスワークにゆさぶられ、中でも望月（明）広沢の健斗が光った。

▽準々決勝

水海道二高（茨城）12（5—0 7—2）2 秋田和洋女高

前半に5—0と優位に立った水海道は後半も攻撃の手をゆるめず圧勝した。力の差がはっきりと表れた試合だった。

日体大（東京）7（2—1 5—1）2 寝屋川ク（大阪）

東西ライバル同士の対戦らしく前半は白熱した攻防が続き、後半へ球趣をつないだが、後半5分をすぎる頃から日体が完全に試合のペースを握り、体力的にも寝屋川を上廻ってやや期待を裏切る内容に終った。日体大にとっては、昨秋の東京国体で雨中戦の末、惜敗しているだけに雪じょく戦だったわけだが、その斗志がものを云ったとでも云うのだろうか。よく走りまくった気力に勝因があった。

清水女商（静岡）4（2—0 2—3）3 梅花ク（大阪）

梅花は後半よく追い込んで同点機もあったが、前半許した二点差が響いて勝てなかった。清水はまとまりのある攻守を見せ、スケールこそ小さいが、基礎プレーに忠実で、高校現役でただ一つ、ベスト4に勝ち進んだのは偉い。

愛知紡績（愛知）6（5—2 1—3）5 熊本商大ク（熊本）

事実上の優勝戦。絶対に見逃すことの出来ない一戦だった。熊本商大クラブは、今年一月の全日本総合室内選手権で優勝した熊本クラブが名前を変えただけ。この大会の決勝で破れた愛知紡績にとっては雪じょく戦でもあった。試合は期待通りの接戦となり、熊本の追い込みで手に汗をにぎる熱斗となった。愛知は、前半、バックスのフォローもよく、ボールの廻転も好調でムダのない攻撃を見せた。対する熊本は持前のシャープさがどうしたことか見えず三点の負担を背負った。後半の熊本の反撃は必死で、素晴らしい斗志を見せたが、余りにも、前半の失点が重く、一点差まで追いつめながら涙をのんだ。お互に持味を活かした攻防で、日本女子界の最高峰にある両チームの激突にふさわしい一戦だった。

▽準決勝

日体大4（0—1 4—2）3 水海道二高クラブ

水海道は、坂野、羽富を除いては殆んどが現役。一方の日体大も昨年のメンバーとはがらりと変っており、共に攻守に若さをのぞかせ、前半は互いに凡攻を重ねるばかりで、僅差のわりに緊迫感が乏しかった。日体大は、後半になると、ようやく調子を出し始め、FWのパスワークも整い、HB小林好リードでチャンスを活かして手固いポイントをあげた。水海道もよく食い下り、どこと云ってソツはなかったが、前半、日体大の不調のスキに、もう少し得点しておくべきで、この時一点しかあげられなかった貪攻がたたった。

愛知紡績14（4—0 10—0）0 清水女商

前日、難敵熊本を破って優勝濃厚の愛知紡はゆうゆうたる試合ぶりで清水を問題にしなかった。清水は高校チームらしく、キビキビと動いたが、実力の差は争われず、愛知紡の攻撃に押しまくられ通してあった。なおシャット・アウトゲームは今大会では、男女を通じて始めてで、愛知紡の秀れたディフェンス陣の実力が充分に発揮された。

▽三位決定戦

水海道二高クラブ8（5—1 3—0）1 清水女商

午前に準決勝、午後に順位戦と云う日程はややきつかったが、水海道は体力的な差と試合運びの上手さで清水を押し切った。清水は動きが鈍く、時にパス・アンド・ランが乱れ勝ちで、凡攻のほとんどを水海道の得点に結びつけられよいところもなく終った。水海道の上位進出は久々で、田村、竜沢らの現役の若さとベテラン羽宮、坂野両OGのリードのよさが上手くとけあっていた。

▽決勝戦

愛知紡績10（7—2 3—3）5 日体大

愛知紡は前半に7—2で大きくリードを奪う。後半、捨身の攻撃を挑む日体大をよく押切って史上初の四連覇をとぐ。

（写真は四連覇の愛知紡チーム）

上昇株の〝ハンドボール〟

＝楽　書　帖＝ 第3回

鶯尾武治

〝ハンドボールってどんなスポーツだい〟なんていう人が多い。スポーツ記者仲間でもハンドボールを見たことのない人もいる。マイナー・スポーツだから見るひともないわけだ。一般の人にはこう説明する。「サッカーのグラウンドでバスケットボールをやるようなものさ。ハンドボールは読んで字のごとく手以外は使えないのさ。こどもでもできるスポーツさ」。これで大体の輪廓が生まれる。これでハンドボールのPRができるわけ。新聞記者でもハンドボールが好きでないと見に行かない。ハンドボールってそんなスポーツなんだ。こんどルーマニアチームが来日したのでハンドボールの株は一挙にあがった。NHKがテレビ中継をやってくれたのが大きい。東京オリンピックにハンドボールが正式種目になりそうなのでなおさらのことだ。

●……六・三・三制実施後に新制中学のハンドボールを見た。いまから十年前のことだ。中体連の山岡先生。（当時杉並区の宮前中学の先生、現在は戸塚一中の校長）「ぜひうちのハンドボールを見てくれ」というので、ノコノコ宮前中学まで出かけて行ったことがある。さすがにいうだけのことはある。チームプレーも個人プレーも大したものだ。スピードがあっておもしろかった。そのころはまだ十一人制だったので、広い校庭に二十二人の若いプレーヤーが飛び回っている姿はたのもしかった。食糧事情が悪いころだったのによくここまで持ってきたものだと感心したものだ。熊本県は小学校、中学校からハンドボールになじんでいるので高校生は断然強い。だから東京都の中学校が十年前のような気力を持てば、東京の高校チームはもっと強くなると思う。

●……東京―山形―盛岡―名古屋―東京と前後九年間、転勤したおかげで地方のハンドボールを少しでも知ったことはよかった。ただ山形県はハンドボールのチームがなかった（二十六年ごろ(。いまは寒河江（さがえ）高校にチームができたとかきいている。山形はバスケットのさかんなところで、ハンドボールの普及が遅れた。東北では宮城、青森がさかん。来年の国体は秋田県で行なわれる。ことしの全日本総合が大曲、湯沢の両市で開かれたので、秋田県下のハンドボールは大きく伸びると思う。盛岡一高には箱崎君（教大OB）がいたけれど、とうとう二年八カ月の間、一度もハンドボールをみなかった。盛岡市内で箱崎君にひよっこり会うといつも「ハンドボールをみせろ」といったほどだ。

時評

背広のファ ンをつかまえよ

低調だった観客動員

六月十五日に来日したルーマニアチームは東日本を主とした会場で十試合を行い帰国したが時評子が試合十結果とともに注目したのはその観客動員数である。昭和三十一年西ドイツが来日した時は全国八会場延べ十四万九千と云う、アマ・スポーツ界はもとより協会関係者自身さえも驚いた程の観客を集めていただけに今回も興味を覚えたわけである。データーはスポーツ新聞によろう。新聞の場合、その観客動員数は主催者側の発表をそのままのせるので大体の見当がつく。

▽第一戦　　二百
▽第二戦　　千五百
▽第三戦　　五千
▽第四戦　一万五千
▽第五戦　一万五千
▽第六戦　　四千
▽第七戦　　七千
▽第八戦　　七千
▽第九戦　　四千
▽第十戦　　六千

となる。ザッと見ても西ドイツとの時の比ではない。事実、総計は六万四千七百である。五千は固いと云はれた第一戦の全早大戦が延着による日延べと豪雨と云う最悪の条件のために千台を割る不入りだったことやドイツの時は地の利のよい大阪球場を使った大阪大会を今回（第六戦）は西宮で行なったこと、前回三万近いファンを集めた愛知大会（第五戦）は半数に減ったことなども一因だが、前回は七会場が万台を記録したのに引きかえ今回は僅かに二会場（名古屋、桐生）だけだったのも大きい。と云うのは、今回の十試合のうち四試合が東京で行はれたからであり、しかも東京四試合の総計一万二千七百は前回の後楽園競輪場に集めた一万九千に遠く及ばないのだからこの差も止むを得ない。観客動員数はその競技の人気のバロメーターと云はれるだけに関係者もちょっと考えなければいけない問題をこの数字は含んでいるようだ。大阪を除く地方五会場はむしろ上出来の動員だった。豪雨の中七千の観衆を集めた宮城県大会などは特筆ものである。関係者が考えねばならないのは東京での関心の無さである。地方は小、中、高校生を動員することが比較的容易だし、ハンドボールに限らず国際競技に接する機会が少ないからよいが、東京は容易ではない。よほど上手に観客動員、観客誘致を考えなければ成功は覚束ない。その点、今回の東京シリーズ四戦は及第点をつけられない拙さがあった。売れる売れないに拘らず切符を目につく所、例えばプレイガイド等で市販すべきだしポスターもどしどし中央に発表すべきである。東京四戦通し券と云う手もあったろう。それに何時までも学生、学童の団体動員ばかりを考えていてはダメである。

第3回全日本学生選手権観戦記

芝浦工大、明大を破り3連覇

第3回全日本学生選手権は7月13日から5日間東京駒沢グラウンドに24校（棄権1）が参加して行われた

鴛尾武治（共同通信社運動部）
杉山茂（N・H・K運動部）

▽一回戦

教大（関東）18（6—4，12—3）7 名古屋大（東海）
日体大（関東）14（7—2，7—8）10 同大（関西）
関学大（関西）10（3—4，7—2）6 東大（関東）
順天堂大（関東）12（8—5，4—6）11 甲南大（関西）
立大（関東）16（8—2，8—4）6 山口大（西日本）
早大（関東）22（10—6，12—9）15 中京大（東海）
立命館大（関西）不戦勝 静岡大（東海）
中大（関東）24（15—8，9—6）14 神戸大（関西）

▽一回戦から好試合と目された日体大—同大は、日体大が滑り出しよく前半15分までに4—1とリード、ディフェンス陣も健斗して同大に攻め入るスキを与えなかった先制攻撃が見事に成功。やや一方的な経過で制勝した。同大は後半猛烈に追い込みをかけたが、前半の不調が余りにも大きく挽回が成らなかった。後半は同大の体力にブがあっただけに前半の失点が痛く響いた。期待された中京大は早大に対し功を焦ったようなプレーが見られ若さを暴露して敗れた。しかし、そのパス・プレーなど、後半は早大を上廻る攻防も見られ今後の成長に楽しみを残した。東大は関学に対して全くよくやった。関学が不調だったとは云え、前半は完全に東大が試合の主導権を握ってゴールゲッター坂本に球を集める策戦も活きていた。関学は後半ようやくリードしたものの優勝最有力と云う前評判だっただけにお寒い試合運びだった。甲南大は順天堂大を関東二部と云うことで少々甘く見ていたために苦杯を喫した。その他では教大に前半五分の勝負を挑んだ名大と、大敗したものの最後まで気持のよいプレーを見せた山口大の健斗がよかった。

▽二回戦

関学大36（15—0，21—0）0 北海道大（北海）

前日の苦戦にこりて関学はスタートから慎重に攻め確実に点をあげて行った。関学にこうじっくり攻められては北大は敵ではなく、前半10分を過ぎる頃からは1分おきに得点されて記録的な大差となった。しかし、北大も試合を捨てずに走り抜き、なんとか一矢をと粘った気力とそのグラウンドマナーは大いに賛えられよう（鴛尾）

芝浦工大（関東）30（19—8，11—7）15 教大

教大が深美、及川のコンビでどこまでやるか注目したのだが前半10分で6—0と開いてはその期待も空しかった。芝工大は金山、塩川の左サイドの安定が目立った（鴛尾）

日体大16（6—5，10—7）12 法大（関東）

法大は余り評判にはならなかったがその野性味のある攻守陣はかなりの力を持っており日体大も油断の出来ない相手だった。果して試合開始から日体大は押され通し。タイムアップ前、北山のシュートで6—5と辛じて逆転したものの後半も10分までは9—8とピッタリと吉村、中里、宮野を中心とした法大FWの健斗に食いつかれていた。法大は後半同点を焦って無理なシュートが多く、そこを逆襲されて最後は地力負けとなったが敗れて悔いのない戦いぶりだった。（杉山）

京大（関西）19（9—8，10—5）13 順天堂大（関東）

8—4とリードされた順天堂大は前半25分頃からよく追い込んで一度は同点とするなど健斗したが、後半京大のペースに巻き込まれて敗れた。京大は前半は浅野、後半は川野とポイントゲッターが確実に働き、GK本田も好守備を見せ、追われ乍らも余裕のあったのが勝因。（杉山）

関大（関西）23（12—6，11—7）13 早大

関大の高村、江尻、早大の恵谷、長沢と共に秀れたロングシューターを擁し豪快な試合になったが早大がややシャープさを欠いたのに反し、関大はよくボールが廻り勝負はあっ気なく前半で決してしまった。（杉山）

慶大（関東）11（4—4，7—6）10 立大（関東）

八度び同点となる接戦で立大が絶えず先行、試合の主導権も立大が握っていた。しかし慶大は守備陣が粘りのあるプレーを見せては後半マイ・ボールを得て食下り、後半26分木本のシュートで10—10とした後、28分辻が右サイドから左スミに決勝点を叩きこんで打棄った（鴛尾）

明大（関東）14（4—3，10—4）7 立命館大

前半の明大は全く不出来で速攻とも遅攻ともつかぬ妙な攻め方をしてシード校らしくない試合運びだったが、後半ようやく風上を利した速攻で順当にポイントをあげた。立命館大は福田の突進力に頼りすぎチームプレーが少なく、明大守備陣の好餌もなっていたために前半相手の不調につけ込んでリードするまでに至らなかった。（杉山）

中大19（11—5，8—8）13 東北学院（東北）

東北学院はよく走り中大に一歩もゆずらぬ攻防を見せたのは偉かった。特に後半は一進一退互角の戦況に終始するなど、堂々とした試合ぶりは地方勢のなかで特筆されるべきものだった。しかし中大はさすがに大脇、平瀬、石井のセンタースリーが素速い球廻しから巧妙なシュートを放って危な気は感じさせなかった。東化学院大ではRI斉のシュート力が目立った。（鴛尾）



第一回大会から三連覇の偉業に輝やく芝浦工大チーム

▽準々決勝

芝浦工大15（9－8　6－6）14日体大

【芝工大】
本藤上倉ロ井藤村田山川
福尾村勝田武佐北山金塩

GK　FB　HB　FW

【日体大】
田井田木川前木山上山上
保　田
福蓮久青宇越青北河栗井
交代FW＝林

44　ＳＴ　33
31　反則　42

日体大は開始5分間に3－0とリード、8分には5－2と順調に得点を重ねた。しかし、ここで芝工大の猛烈な逆襲にあって10分から5分間に連続5点を失い、その後、井上、北山らのミドルシュートで追撃したものの試合をリードすることが出来ずこの時の失点が負担になった。芝工大は珍しく個人プレーが多く好調とは云えず、もし、三本得た14m投を山田が失していたら負けた試合だった。逆に日体大は大事な時に14m投をとられたのが響いた。（杉山）

関　学23（10－3　13－11）14京　大

【関学】
河原淵部部田野向場地井
小藤山服安村小日市宮藤

GK　FB　HB　FW

【京大】
田崎川田野光垣野野井竹
本石堀奥小金西川浅酒佐

32　ＳＴ　42
35　反則　24

前半は関学の一方的ペースだった。特に日向、宮地のコンビネーションが素晴しく、京大ディフェンスがこの二人をマークし切れなかったために大きく差がつき。後半、京大はよくタテの突進を活かし7分から連続5点をあげるなど健斗したが追いつけなかった。京大FWはセンタースリーの動きはよかったがウイングに鋭さがない。（鴛尾）

関　大13（7－6　6－2）8慶　大

【慶大】
交代FW＝西原
兄井本川保藤　諏本藤田
塚　久　辻　野
大桜橋岸高須　訪木斉小

GK　FB　HB　FW

【関大】
原村野村田辺尻田田上村
留
金岩長中日渡江寺松池高

30　ＳＴ　22
60　反則　29

互いに高村、木本と云うポイントゲッターをHB陣がつぶし合ったため、いやでもフォーメーションプレーの連続となり、特に前半は見応えのある攻防が展開された。後半10分まで一点差で追っていた慶大は、そのあとパッタリFWの出足が止まり、そのスキを関大得意の江尻、高村らを使うウイング攻撃に襲われて差をあけられた。慶大の善戦が讃えられる一戦だったがその慶大も後半10分以後は疲れから一点もとれなかったのはさびしい。関大では前半高村のマークされるスキに松田、池上が堅実なプレーを見せていたのが見逃せない。（鴛尾）

明　大12（6－4　6－4）8中　大

交代FW＝上垣内
村　士辺沢橋中瀬脇井林
井
【中大】
磯　福沢桶高田平大石小

GK　FB　HB　FW

【明大】
屋田藤岡水淵田野岡野本
板神佐浜清溝高横正浅藤
交代FW＝吉沢

21　ＳＴ　26
22　反則　60

明大が実にち密な攻防を見せたのに反し、中大はすべて大まかで、じっくり相手バックスの崩れを待ってシュートを放つ明大が着実なポイントをあげてリードしたのは当然だった。中大はプレーが雑で、特にバックスが56も反則をとられ、前半5分2－0とリードし自軍のペースを握りかけた時、連続14m投を課せられて与えずもがなの得点を許すなど拙いプレーが多かった。実力者を揃えているだけに中大の試合展開力の拙さは惜しい。（杉山）

▽準決勝

芝浦工大11（5－6　6－3）9関　学

交代B＝富川
【関　学】
河原淵部部田野地向場井
小藤山服安村小宮日市藤

GK　FB　HB　FW

【芝工大】
本藤上倉ロ井藤村田山川
福尾村勝田武佐北山金塩

24　ＳＴ　24
26　反則　38

芝工大の速攻、関学の遅攻の対戦だったが、芝工大のバックスは関学の遅攻を意識したのがかえって悪くそのペースに巻きこまれ、しかもエース山田の不調が重って最後まで苦戦、ヒヤヒヤの試合ぶりであった。固くなった芝工大バックスから巧みに反則を誘発して4分、5分連続して日向が14m投を決め、8分金山に一点を決められたものの9分日向、12分市場、15分日向と連続シュートして15分までは関学のワンサイド、さすがの芝工大も顔色がなかった。しかし20分をすぎて芝工大の速攻が決まりだし、29分やっと5－5。だがそのあとすぐ日向にゲットされて前半を終った。後半になると関学は珍しくも速攻に切替えた。関学の見せた速攻は、打倒芝工大への秘策であり、前半の一点差の優位にモノを云わせて一気にここで差を開こうと云う策戦であったろう。だが芝工大は後半2分佐藤のシュートで遂に追いついた。以後は東西NO・1同士の速攻による激突で一点を争う好ゲームとなった。同点になること三度。ただ、この間に芝工大が連続3本の14m投をミスした。これが決っていれば早めに安全圏に入っていたところだった。9－9から芝工大は28分金山が中央を巧みに割ってバウンドシュートを決め、これで勝負がついた。関学は途中から東大戦で負傷した巧技富川をも動員させ懸命の攻防であったが遂に刀折れ矢つきた感じであった。芝工大が金山、佐藤と云う豪快な一発屋を決め手に持っていたのに対し、そうしたタイプが関学に見られなかったのも敗因の一つだろう。好試合だった。（鴛尾）

明大15（8−6 7−4）10関大

【関大】		【明大】
金原	GK	板屋
岩村	FB	神田
長野		佐藤
中村	HB	浜岡
日留田		清水
渡辺		溝淵
江尻	FW	高田
寺田		横野
松田		正岡
池上		浅野
高村		藤本
		交代FW＝吉沢
22	ＳＴ	28
61	反則	28

明大はこの大会速攻、遅攻を巧みに使いわけている。どちらも持前の小きざみなスピードのある動きが支えになっているのだが、ラフな関大バックスをゆさぶるには効果があった。特にこの日は正岡浅野のコンビがよく動いて関大バックスをよく割っていた。試合は前半20分まで一進一退。このあと関大が一寸調子を落としたスキを明大が三点連取して優位に立った。後半も同じような経過が続いたが関大は江尻と高村が佐藤をリーダーとする明大ＨＢ陣に徹底的にマークされて反撃のチャンスをつかめぬままズルズルと押し切られてしまった。（杉山）

▽三位決定戦

関学15（10−5 5−8）13関大

【関学】		【関大】
小河	GK	金原
藤原	FB	岩村
山淵		長野
服部	HB	中村
安部		日留田
富川		渡辺
小野	FW	江尻
日向		寺田
市場		松田
宮地		池上
藤井		高村
交代FW＝村田		
35	ＳＴ	29
33	反則	37

関西の好カード関関戦。優勝に縁なしとは云えどちらも負けられず白熱した試合になった。前半は関大は1−3とリードされた劣勢を江尻、寺田、高村らのミドル、ロングを混用したオープン攻撃ではね返し優勢。後半は逆に関学が日向、市場のコンビで追い討ちをかけたが、関大は後半10分11−7とリードし逃切るかに見えた。しかしこのあと関学は速攻からチャンスをつかみ市場、安部、宮地らのゲットで18分11−11とし、そのあと再びスローペースから勝越機を狙って25分日向28分市場がシュートを決め関大を降した。関大は勝利濃厚だったが追いつかれてプレーが弱気になり惜しいことをした。

▽決勝戦

芝浦工大13（5−5 8−4）9明大

【芝工大】		【明大】
福本	GK	板屋
尾藤	FB	神田
村上		佐薬
勝倉	HB	浜岡
田口		清水
武井		溝淵
佐藤	FW	高田
北村		横野
山田		正岡
金山		浅野
塩川		藤本
		交代FW＝吉沢
25	ＳＴ	19
51	反則	20

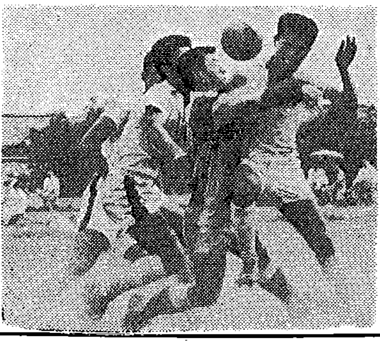
明大が意表をついて遅攻に出たためスピーディな決勝戦とはとても云えなかったが、芝工大が危げなく第一回大会以来三連覇に輝やく。

物足りないスピード感

総評　中沢重夫

高松宮杯第三回全日本学生ハンド・ボール選手権大会は、七月十三日高松宮両殿下をお迎えして東京駒沢ハンド・ボール競技場で開幕した。本年は初参加の北海道大学を加え24大学の精鋭が五日間にわたって白熱した試合を展開した。この大会は真夏の暑さのなか開かれるだけに選手は大変で勝ち抜くにはそれを克服し、いはゆるスタミナと力を持つ事が必要となってくるし、又選手のコンディションをうまく調整し試合にぶつけたチームが予想以上の健闘を見せる事にもなるだけに各チーム共相当頭をなやましたのでなかろうか。

今大会は予想通り強豪が勝ち進み昨年より幾分実力が落ちたかと云われた芝浦工大と明治大の決戦となり昨年この大会の決勝と同じ顔合わせとなった、明治大もよくねばったがスピードにまさる芝浦工大が後半よく走り三年連続優勝の栄冠をものにした。三位決定戦は関学が前半関大にリードを許したものの後半よく走り逆転勝した。さて芝浦工大は昨年この大会に優勝して以来通算三十四連勝を記録した訳でその強さは抜群と云えようがしかし今大会の試合ぶりは決して会心の勝利と云うべき試合がなく連日苦しい内容での勝利であった、勿論ルーマニア戦を終った直後のこの大会であったたけにその調整に苦しんだと云う事はあっただろうがそれにしても多くの凡ミスが目立ちそのミス故にピンチに自から落ちこんでいった様な試合ぶりは感心できない。勿論この事は芝浦だけに限らず全般的に云える事だが先般来日したルーマニアチームの試合ぶりは凡ミスなど皆無と云ってよい位であったし、それはいわゆる基礎技術が完全であるからと云えるだろう。芝浦工大も決して図ぬけて居る訳でなく紙一重にせまって居るチームがあるだけにもっと努力せねば王座の位置を保持する事はむづかしいだろう。この芝浦工大を破るのでないかと目された日体大、関学大、明治大等も今回は僅少の差で破れはしたものの破るべき力を持って居るだけに今後の健闘に大きな期待を寄せたい。それでなくして学生ハンド・ボール界の向上は望めないのでなかろうか。今大会を通してみて少しスピードに欠ける試合が多かった様に見うけられもう少しスピーディな攻防戦が欲しかった事、それに今大会も相変らず十四米スローの成功率が悪るくそれ故に苦しいゲームを招く結果となったチームが多かった事なども目立った。それに今春の関東学生リーグで念願の一部昇格を成した法大は一部第二位の日体大によく食いついた健闘ぶり、中大と互格に渡りあった東北学院大、関学のスキをつき、乱れに乗じたとは云えよくチャンスを生かし、後半なかば迄五分の対戦をした東大、初出場の北海道大が関学に大量の得点を許しながらも最後迄全力をつくしてよく戦った試合ぶりなど賞讃に価するものであろう。



（写真は決勝・速攻の芝工大と遅攻明大の対決、後半リードされた明大は、10分芝工大北村（中央）のシュート寸前を溝淵（右端）が体当りの反則で防ぐ）

第十一回全日本高校選手権

精神力、基礎技術に"課題"残す

～男子中京商、女子熊本市高史上初の三連覇～

総評　村田弘（大会審判長）

予想通りの決勝戦

戦前の予想は男子が昨年度優勝の中京商（愛知）これを追って桜台高（愛知）清水商（静岡）の順、女子は熊本市高（熊本）を筆頭に半田（愛知）水海道二高（茨城）栃木女高（栃木）が圏内とされていた。結果は全く予想通りとなり、中京商、熊本市高の優勝となったが、時に熊本市高は史上初の三連覇を同時に遂げたことになり、中京商も連続制覇の偉業であった。とかく夏場はコンディション調整などの問題で番狂わせの出来るものだが、予想通りに終ったことは、有力チームの力の確かさを示すものであろう。しかし一面、昨年あたりに比べ体格、技術、スケールの点でやや低調の感はまぬがれなかった。このことは、中京商コーチの宇津野年一氏や熊本市高監督の北川浩氏も認めていた。やはり、これは高校"三年"制度と云う問題に、つながっているのであろうか。

さて、今大会をふり返ってコンディション、ファイト、技術、走力、攻防、筋力、作戦、などに亘って私見を述べることにしよう。

（コンディション） 猛暑下、連続五日間と云う日程のためコンディションは最良ではなかった。しかも夜は暑く、旅館の環境にも不備な点があり、グラウンドも少し固かった。夏場は、特に睡眠と栄養が、若い選手の最大の武器である。また、水分のとり過ぎで体力の消耗がはなはだしかったチームが二、三に留らないのは、ノドが乾いても水を欲しがらない辛抱をしつけておく平生の訓練が必要である。これらの問題や疲労に対する措置について監督、選手は更に今後は熟慮すべきであろう。

（ファイト） 暑さ、不眠、食欲不振でファイトに欠けたダルゲームが見られたのは残念である。ファイトなくしてよい技術も、立派なゲームも出来ない。極言すれば男女とも、決勝戦以外ファイトに満ちた満点のゲームはなかった。精神力未だしと云えよう。

上、下位校の差縮まる

（技術） これまでに比べ、上位校の技術は歴代より劣っていたが、下位校は充実していた。それだけ上、下位校の差が縮まったとも云えよう。技術面で具体的な長短を指摘すると――

イ、ハンドボールの基本である動いてプレーする技術が充分でない。

ロ、攻撃のきっかけを掴むことを知らない。

ハ、パスのコントロールがない

ニ、ミスから得点の生れることを知らない。

ホ、シュートの時のボールの構えの位置が低すぎる。

へ、基礎的な防御技術を知らない。又、指導者が勝たんがために間違った（荒っぽい）教へをしている。これは是非改善してほしい。

ト、女子のバック陣が味方ボールになるやいなや、いち早く攻撃に参加して得点出来るようになった。これは非常な進歩である。

チ、個々の技術は、基礎体力と同よう、年々向上して来ている。

リ、試合のペースをもっと、もっと知ること。

（走力） 「走らねば勝てない」ことを選手が知って来たことは喜ばしい。しかし、基礎体力とか、練習の不充分で、未だしの感があり特に女子のゲームなどは、その差がスコアにはっきり表われ、一ゲーム中走り通したチームが勝っている。本大会は走力に優れたチームが勝進み、走力のないチームが順々に負けて行ったと云っても過言ではない。

（六人攻撃、六人防禦） 六人防禦は一応やっている。六人攻撃も人員は六人だがバックスから攻撃に参加した者が攻撃の目的にそった動きが出来ない。走力同ように必要だと云うことを知っているのだが、自信を持てずアイマイな動きになってしまうのは一考を要そう。しかし、この問題は今後の練習如何で、理想のハンドボールに近ずこう。

（筋力） 下半身の筋力は非常によくなったが、上半身の筋力（肩、腕、手首）が弱い。基礎能力だからもっと強くしなければならない。熊本市高のボールのスピードは、手首の強さを示している。（雨の日とか合宿中に腕相撲をして鍛えるそうだ。特に女子は圧倒的なスピードを見せ、男子に優るとかさえ云われている）

綿密な作戦が不充分

（作戦） 勝つためには敵をよく知ること、作戦のないゲームはなく、また、勝利も望めない。各チームとも作戦が充分立てられていないし、あっても忠実に実行されていない。もっと得点に結びつく攻撃作戦を立てなければなるまい。今後技術の指導によって、作戦も綿密にしなければならない。

（マナー・他） ゲーム前の練習でグラウンドに馴れさせることを忘れ、短かい時間にあれこれと平生やっている練習を、少しづつやっているが、あれでは選手は落着か

ない。試合前は選手を落ちつけ疲れをさけることが一番である。目が馴れていれば平生から積み上げた練習の成果は試合に表われて来る。この点、監督、コーチは少し神経質になりすぎている。その他代表チームであり乍ら運動靴で試合したり、学生帽をかぶって練習しているチームがあったのは反省すべき問題であろう。

上位校の攻撃力分析

ところで、勝残った上位チームの攻撃力を数字の上から眺めてみよう。本大会男女68ゲームスのうち、シュート率がよくて負けたのは4ゲームス（男2女2）でシュート率をよくしなければ勝てないことを如実に物語っている。別表で見て判るようにシュート率のよい順に上位から並んでいるので、それは一層はっきりする。

ベスト・チームは？

それでは最後に、男女ベスト・チームを選出しておこう。会場が分散しており、一、二回戦の中で観戦出来なかったゲームもあるが、その点の不備は予め御諒承願いたい。まず男子では

GK 奥本（中京商）
B 渡辺（桜台高）
　 吉田（中京商）
　 都築（中京商）
　 斉藤（清水商）
　 藤井（寝屋川）
RW {金田（中京商）
　　 {青木（塩山高）
RI 井之下（伏見高）
CF {森（桜台高）
　　{山田（清水商）
LI 深谷（中京商）
LW 尾之内（桜台高）

と云ったところ。バックスは残念乍ら秀れた選手が見当らず一名欠員である。FWでは特にRIに選んで来はCFだが、RIは人材不足である。RIでは井之下は元来はCFだが、特にRIに選んでみた。LW尾之内は桜台の一六八本のシュートのうち五五本を放ちしかも二九得点を記録している。本大会の最優秀選手に推してやぶさかではない。CF山田は、明石高の前田と並んで左右のシュートを自由に操って見事なプレーを見せてくれた。なお、この他では、左では大西（寝屋川）、体格の良い藤野（足利）、小畑（伏見）、中村（大宮）斉藤（寝屋川）らも好い選手であった。一方女子では

GK {西村（熊本）
　　 {篠崎（栃木）
FP {西村（熊本）
　　 徳永（熊本）
　　 磯部（半田）
　　 早川（半田）
　　 峰山（井原）
　　 伊藤（静岡城北）

注…FPはフィールドプレイヤーの略

と云ったところであろうか。GK西村はそのキャリア六年に及ぶそうでスピードに対して動じない。篠崎のファイトも光っていた。

フィールド・プレィヤーでは西村、磯部は攻撃人として第一人者であり、時に西村の走力腕力は出色。熊本の42得点中20点をかせいだのでも判る通りである。徳永、早川、峰山はバックスでありながら、得点力もあり、伊藤のハンドリングのよさ、配球の上手さも鮮やかであった。この他では、GKでは正木（半田）、フィールドプレィヤーでは久連松（熊本）、清田（熊本）、宇井（栃木）、左の園（京都女子）らが好プレィヤーであった。なお、筆者の選んだ優秀チームは男子では中京商、桜台高、清水商、女子では熊本市高、半田高、また敢闘チームは男子では寝屋川高、小松高、女子では井原高を推したい。

高校選手に与う

高校選手諸君に与える言葉――それは、高校ハンドボール界は日一日と進歩、向上している。立派なチーム、優秀な選手は湧いて生まれて来たのではなく、猛練習によってつくりあげられたのだ。今後も現在に満足することなく努力して欲しいものだ。オリンピック東京大会での主力選手として、この上ない活躍場が待っている現在の高校ハンドボール界の躍進を期待して止まない。

全国高校選手権開会式に賜った
高松宮殿下のお言葉

一昨年の北海道以来、二年振りで皆さんにお目にかかりました。

聞くところによりますと、ハンドボールも一九六四年東京オリンピックには、正式種目として認められようとしているそうでありますが、この間わが国のハンドボールも年々急速に普及し、特に近年は、技術的に著しい進歩を遂げつつあることは、誠に喜びに堪えません。

四年後のオリンピック大会の選手は、おそらく皆さんのような若い人々を主力に選ばれることとおもいます。皆さんは、この大会において、日頃練磨された精神と技術とを十分に発揮して、本大会を成果あらしめるとともに、今後さらに努力を重ねて、オリンピック東京大会の基礎を作られるよう希望して、私の挨拶といたします。

―男子ベスト 8 攻撃力比較表―

	試合数	シュート数	総得点	シュート率	一試合平均得点
中京商	5	102	56	0.55	11.2
桜台高	6	168	85	0.51	14.2
清水商	5	116	59	0.50	11.8
寝屋川高	4	82	39	0.48	9.8
塩山高	3	74	29	0.39	9.7
伏見高	3	67	26	0.39	9.0
小松実業	3	61	27	0.44	8.7
鎌倉学園	3	85	27	0.32	9.0
男子合計	36	1753	669	0.38	9.1

―女子ベスト 4 攻撃力比較表―

	試合数	シュート数	総得点	シュート率	一試合平均得点
熊本市高	5	148	42	0.28	8.4
半田高	5	154	38	0.25	7.6
井原高	4	127	39	0.30	9.7
明善高	4	105	29	0.22	7.3
女子合計	32	1751	385	0.22	5.9



高校大会成績

▽男子の部一回戦

津山商 11—6 加治木高
盛岡一高 13—4 上田高
桜台高 22—4 安積高
和歌山商 11—9 埼玉大宮高
清水商 18—6 高島高

▽二回戦

中京商 15—6 盛岡一高
明石高 15—4 湯沢高
塩山高 16—5 函館工
和歌山商 12—11 麻生高
伏見高 12—7 天城高
桜台高 15—5 新居浜工
添上高 12—9 仙台一高
桐生工 15—11 岐阜高
小松実業 13—12 神代高
青森高 12—7 修道高
足利高 11—6 四日市工
氷見高 9—5 坂出工
清水商 11—9 熊本市商
寝屋川高 10—9 西南学院
下関幡生工 11—4 弘岡農
鎌倉学園 13—7 津山商

▽三回戦

中京商 10—6 明石高
塩山高 10—6 和歌山商
桜台高 14—2 添上高
小松実業 12—10 桐生工
伏見高 7—5 足利高
清水高 11—6 氷見高
寝屋川高 10—1 青森高
鎌倉学園 6—5 下関幡生工

▽準々決勝

中京商 8（5—2、3—1）3 塩山高
寝屋川高 10（4—3、4—5、※ 0—0、2—0）8 鎌倉学園
桜台高 8（4—2、4—0）2 小松実業
清水商 12（5—3、7—4）7 伏見高

▽準決勝

中京商 11（7—6、4—1）7 清水商
桜台高 15（7—6、8—3）9 寝屋川高

▽決　勝

中京商 12（3—3、5—5、※ 2—3、2—0）11 桜台高

▽優勝中京商（愛知）メンバー

GK 奥村
B 葛島 吉田 石田 都築
FW 石川 金田 杉本 森田 深谷 ◎近藤
SVB 柴田 滝 坂野 横井

監督・藤松博、マネ・鏡味義行

▽女子の部一回戦（一試合のみ）

水海道二 15—1 彦根西高

▽二回戦

熊本市高 7—5 水海道二高
大垣南高 7—6 県立尼崎高
静岡城北高 12—3 平塚江南高
倉敷青陵高 3（抽せん）3 山梨高
明善高 9—6 若松一高
半田高 9—6 京都女高
熊谷商工 14—6 六郷高
徳山高 8—5 涌谷高
栃木女高 7—2 新居浜東高
桜水商 7—3 菊池農蚕高
井原高 16—4 高崎市高
函館東高 9（抽せん）9 羽咋高
花巻南高 10—2 添上高
那賀高 13—5 四日市高
高岡高 7—5 呉三津田高
有磯高 11—2 豊中高

▽三回戦

熊本市高 15—1 大垣南高
静岡城北高 6—3 倉敷青陵高
明善高 9—1 函館東高
半田高 8—3 熊谷商工
栃木女高 5—4 徳山高
井原高 7—3 桜水商
那賀高 6—2 花巻南高
有磯高 5—2 高岡高

▽準々決勝

熊本市高 5（3—2、2—1）3 静岡城北高
半田高 5（1—3、3—1、※ 1—1、0—0、抽せん）5 栃木女高
明善高 6（1—1、5—2）3 那賀高
井原高 9（5—4、4—0）4 有磯高

▽準決勝

熊本市高 8（5—2、3—0）2 明善高
半田高 10（4—4、6—3）7 井原高

▽決　勝

熊本市高 7（2—2、5—4）6 半田高

▽優勝、熊本市高（熊本）メンバー

GK ◎西村美
FB 小野 徳永 清田
HB 石川 西村（八） 久連松
FW 篠原 岡松 川島 岩田 石島 増永 城

監督 北川 浩



荒川氏（日体監督）GKに？

日体大の荒川監督自らGKに…と云っても、荒川氏が率いる日体大チームが宿敵芝工大に再三苦汁を飲まされたから業を煮やした荒川氏が自らゴールを守り、日体大のため健闘という場面ではない。タネを明かせば過日全日本教職員大会決勝リーグの合間に行なわれた審判団と東京職員団親善試合の一コマ・審判チームの名キーパー振りである。結果は接戦のすえ一点差で審判団が敗退したが、日頃うるさがたの協会役員、審判もこの時ばかりは、かっての名選手ぶりを発揮しようと、奮戦これつとめ名（迷?）技、珍技を披露して和やかな試合を展開した。

お・願・い 地方在住のハンドボール関係者による〝地方通信〟〝地方大会戦績〟その他各地方ハンドボール界に関するニュースの寄稿を歓迎致します。特に地方選手権関係の記事は万難を排して掲載するつもりです。よろしくお願い致します。宛先は東京都千代田区神田駿河台体協内日本ハンドボール協会編集部まで



写真は初栄冠に輝やく神戸ストーク・チーム

――第3回全日本教職員選手権――

神戸ストーク初優勝

第三回全日本教職員ハンドボール選手権大会（7人制）は、8月19、20、21日の3日間、全国から15チーム（うち棄権2）が集り、第1日のみ東京駒沢グラウンド、第2日からは駒沢のグラウンドコンディション不良で日体大体育館と会場を変えて行われ、第1回優勝の茨城クラブ、前回優勝の東京教員団がともに予選ラウンドで姿を消すと云う波乱もあり、熱戦がつづいたが結局、神戸ストーク（兵庫）が初優勝を遂げた。

総評　高嶋　洌

今大会はたまたま台風十四号に見舞われ、二日目から急遽会場を日体大体育館に移す等、主管である東京都ハンドボール連盟には大変御苦労を願ったが、将来のためには良い経験になったと思っている。特に七人制競技のように、こまかく動きまわる必要のある大会（女子にも同様のことが言える）には、雨天を考慮した予備体育館の準備等も、必要になって来たような感じをうける。将来研究する重要な問題の一つであろう。

スポーツ団体の行うべき仕事は沢山あるが、その中で正しい認識に基いた普及（競技人口の増加）と競技技術の向上は、最も重要な役割をもっていることは、いうまでもない。特にハンドボールのように比較的新しい種類のスポーツは、国際試合に上位進出することもさることながら、国内における普及に重点をおき、競技人口の増加に尽力することは当然のことである。この国内普及の最も重要な役割を果すのが、各地における指導者達である。スポーツの創設期における個々の指導者が、真剣な努力の対象としてスポーツを採り上げたかどうかが、そのスポーツの歴史を左右するといっても過言ではあるまい。そのような理由と意図をもって、年一回の教職員大会が実施されている訳であり、したがって必ずしも高度の技術等は、要求されない。むしろ、〃一度もやったことはないが一度やって見たい〃というような人々が同僚と一諸に年一度上京し、知らないことを教わりながらそれでも数回のゲームを行って帰ることが尊いことである。「百聞は一見にしかず」とか、一度正規のゲームを体験することは、理論の上でも又指導の面でも強い自信となって現れるものである。そしてそのような人々が、地域において、又学校においてハンドボール普及の〃核〃となることを期待するものである。

技術的には回を重ねるごとに充実し、特に今回は飛躍的に向上したように見受けられる。特に各府県において、予選を行い、合宿練習を行って来るチームが多くなったことを聞き、その努力に敬意を表するものである。

個人的には、茨城の山内・砂田神戸の新井・幸田、三重の日沖、長野の加藤、柳沢、高知の小野、栃木の山下、京都の小西・藤本、奈良の高橋、大阪の太田等々が学生時代よりも一層みがきがかかってうまみのあるプレーを見せてくれた。好漢の自愛を望むや切なるものがある。

前述したように台風の影響にもかかわらず特別な事故もなく終了したことは、流石に指導者の集りであると感心させられた。しかしながら二・三のチームに残念ながらグランドマナーに欠けるところがあった。今後の自重を望んでやまない。

大会記録

▽Aブロック

神戸ストーク 22－5 三重教員団
茨城クラブ 15－9 長野教員団
神戸ストーク 16－7 長野教員団
神戸ストーク 31－25 茨城クラブ
長野教員団 不戦勝 三重教員団
茨城クラブ 不戦勝 三重教員団

（同順位）①神戸ストーク3戦3勝、②茨城クラブ2勝1敗③長野教員団1勝2敗④三重教員団3戦3敗、Aブロックに参加予定の愛媛クラブは棄権

▽Bブロック

高知クラブ 8－4 栃木教員団
旭桜クラブ 13－8 興東クラブ
（東京）　（奈良）
高知クラブ 8－1 鳳高クラブ
（大阪）
興東クラブ 13－7 栃木教員団
旭桜クラブ 8－1 鳳高クラブ
旭桜クラブ 38－19 栃木教員団
高知クラブ 18－6 興東クラブ
高知クラブ 15－11 鳳高クラブ
栃木教員団 7－6 旭桜クラブ
高知クラブ 20－16 鳳高クラブ
興東クラブ

（同順位）①高知クラブ4戦4勝②東京旭桜クラブ3勝1敗③奈良興東クラブ2勝2敗④栃木教員団1勝3敗⑤大阪鳳高クラブ4戦4敗

▽Cブロック

香川教員団 13－3 東京教員団
京都教員団 10－4 香川教員団
京都教員団 19－6 呉　クラブ
呉　クラブ 17－13 東京教員団
香川教員団 15－12 呉　クラブ
京都教員団 26－12 東京教員団

（同順位）①京都教員団3戦3勝②香川教員団2勝1敗③東京教員団3戦3敗、Cブロックに参加予定の岐阜クラブは棄権。この結果各ブロックの一位、神戸ストーク（A）高知クラブ（B）京都教員団（C）が決勝リーグに出場。なお、Bブロック予選第二日（二十日）に行われた東京旭桜クラブ対栃木教員団の38対19――一試合合計得点57は、男女及十一人制、七人制を通じてハンドボール界始って以来の記録的スコアである。

▽決勝リーグ

神戸ストーク 12（9－0、3－3）3 高知クラブ
神戸ストーク 18（11－4、7－4）8 京都教員団
高知クラブ 11（5－6、6－4）10 京都教員団

この結果、神戸ストークが初優勝、以下高知クラブ、京都教員団の順となった。（神戸ストーク・メンバー）監督大原靖男、主将小島正男、選手新井、平、梅田、横田、近藤、狩野、幸田、南、泉、藤原。

×　×　×　×　×
　×　×　×

地方だより

関東高校選手権 塩山と栃木女に栄冠

第六回関東高校選手権は七月二十三日から四日間埼玉県大宮市で行われ男子は塩山高（山梨）、女子は栃木女高がそれぞれ優勝した。

▽男子一回戦勝者　明星高、神代高（以上東京）春日部高、大宮高（以上埼玉）水戸工、石岡一高（以上茨城）関東学院（神奈川）日川高（山梨）佐原一高（千葉）富岡高（群馬）足利工（栃木）

▽男子二回戦

鎌倉学園（神奈川）　6—5　明星高
桐生工（群馬）　8—4　春日部高
神代高　18—8　大宮高
日川高　15—6　浦和市高（埼玉）
石岡一高　13—12　富岡高
足利高（栃木）　9—6　関東学院
水戸工　11—7　足利工
塩山高（山梨）　18—7　佐原一高

▽男子三回戦

鎌倉学園　14—11　桐生工
神代高　14—7　足利高
日川高　11—8　水戸工

▽男子準決勝

塩山高　12—6　石岡一高
神代高　10（6—4／4—5）9　鎌倉学園

▽男子三位決定戦

塩山高　14（8—5／6—2）7　日川高

▽男子決勝戦

鎌倉学園　9（2—5／7—3）8　日川高
塩山高　15（6—6／9—4）10　神代高

▽女子一回戦勝者　石岡八郷高分校、岩井高（以上茨城）足利女高（栃木）都立二商（東京）小松原女高（埼玉）

▽女子二回戦

熊谷商高（埼玉）　12—6　石岡八郷高分校
井草校（東京）　9—5（延長）　甲府二高（山梨）
高崎市高（群馬）　11—3　都立二商
山梨高（山梨）　15—0　小松原女高
太田二高（茨城）　6—1　足利女高（栃木）
日川高（山梨）　6—5　大津高（神奈川）
深谷女高（埼玉）　3—2　日立女高（茨城）
栃木女高（栃木）　23—0　岩井高

▽女子三回戦

太田二高　10—1　日川高
栃木女高　12—0　深谷女高
熊谷商高　10—5　井草高
山梨高　5—1　高崎市高

▽女子準決勝

熊谷商高　6（2—1／4—1）2　山梨高
栃木女高　5（1—3／4—1）4　太田二高

▽女子三位決定戦

太田二高　8（4—2／4—1）3　山梨高

▽女子決勝戦

栃木女高　3（1—2／2—0）2　熊谷商高

【後記】　男子27、女子21と質的にも充分で、しかも各県のインターハイ出場校の殆どが出揃っていたので面白い試合が多かった。男子ではこの大会では常に勝進んでいる塩山と日川の山梨勢が今年も健斗し、塩山は宿望の初優勝を遂げた。その他では神代が準決勝で鎌倉学園（前回優勝）を破ったのが注目され、伝統の世田谷工（東京）桐生工、足利高らはやや期待に反した出来だった。女子は栃木女高、熊谷商工、太田二高がトップクラスでこれに水海道二高（茨城）が加っていれば一層球趣を盛り上げただろうと惜しまれる。栃木の優勝は順当だったが太田、熊谷との実力は紙一重。この三校以外はやや低調で、僅かに山梨高が目にとまっただけと云うのは、関東女子高校界の層の薄さを物語るものだろうか。なお二回戦の栃木女高23—0岩井高は最近では珍しい記録的大差ゲームである。

二つの東西大学定期戦

第十一回関大対法大定期戦は六月二十六日、千里山関大グラウンドで行われ、関大が後半法大の追撃に苦しみながらも秀れたFW力で制勝した。

関　大　14（5—6／9—5）11　法　大

※

第十回京大対東大定期戦は六月二十六日、京大農学部グラウンドで行われ京大が攻守に好調で圧勝。対戦成績は京大の9勝1敗となった。

京　大　21（10—3／11—6）9　東　大

※

なお毎年六月に行われる伝統の早大対関学定期戦は、今年は国際試合のため九月十八日、東京小石川球技場に延期された。

愛知学芸大が優勝
東海地区国立大学大会

第九回東海地区国立大学体育大会ハンドボール競技は七月十、十一の両日名工大千種グラウンドで行われ愛知学芸大が決勝で岐阜大を破って優勝した。

▽五、六位決定戦

静岡大　11—6　三重大

▽三位決定戦

名古屋大　17—9　名工大

▽優勝戦

愛知学芸大　14—8　岐阜大

最初のラジオ放送の誤りについて　（前号）

第二号、二十二頁の豆辞典の項は間違っておりますのでお教へ致します。

※

全国にラジオを通じて中継放送された第一号は戦前、昭和十六年一月十九日（日）南甲子園運動場で第三回東西対抗が行なわれた際であり、観客動員も一万二千を数えた。なお戦後の全国放送第一号は第五回東西対抗が昭和二十五年一月八日（日）丸亀市城内グラウンドにおいて開催された際で、BKの倉田アナにより全国放送され観衆無慮一万五千で当日は高松宮殿下の御台臨を仰いでいる。

〔大阪・馬場太郎氏投稿〕

▽御親切な御教示を御礼申します

（編集部）

京大、三連勝成る

第四回国立七大学選手権大会は、七月十、十一の二日間、東大御殿下グラウンドに北大、東北大、東大、京大、神大（名大は棄権）の六チームを集めて行われ、予想通り京大が攻守に群を抜いた出来で優勝。三年連続の制覇をとげた。これでこの大会の優勝は京大三回、神大一回となった。

熊本の熱心さ……

熊本県協会では「熊本ハンドボール」と云うとう写版刷り乍ら、立派な協会報を持っている。今シーズンの一号から五号までが揃っているが、何れも試合記録が中心。百字前後の後記や戦評が付いてい

るところなどは地方チームにとって、よい研究資料になろうし、その他ニュース記事もある。第四号には「熊本教職員クラブでは超小型五人制ハンドボールを計画して居る」などと云う特だね（?）もあり面白い。こうした、熱心な努力が、最近の熊本ハンドボール界の躍進の重要な根底となっていることを考えれば、各県協会が、こぞってこうしたものを作るよう心がけて欲しいものだ。

国体予選たけなわ

第十五回国民体育大会ハンドボール競技は、十月二十四日から四日間、熊本県水俣市で一般男子十（北海道、東北、北陸、関東、東海、近畿、中国、四国、九州、熊本各一チーム）一般女子十（同）高校女子十（同）高校男子二十七（北海道、熊本各一、北陸、中国、四国、九州各二、近畿、東北各四、東海三、関東六）の合計五十七代表を集めて行はれるが、すでに九州及び北海道地区代表が決ったのを始め、全国各地区における予選がたけなわ、フィールドシーズン最後を飾るにふさわしい熱戦が展開されている。現在（九月十日）までに決定している各地区代表次の通り（順不同）

▽九州地区
高校男子　福岡西南高　鹿児島甲南高
高校女子　福岡明善高
一般男子　福岡クラブ
一般女子　福岡クラブ

▽北海道地区
高校男子　函館　高
高校女子　函館　高
一般男子　函館サンダークラブ
一般女子　函館フレップクラブ

▽関東地区
高校男子　神代高、水戸工、富岡高、鎌倉学園、大宮高、塩山高
高校女子　栃木女高
一般男子　大崎電気
一般女子　日体大

▽四国地区
高校男子　新居浜工　松山工
高校女子　新居浜東
一般男子　住友化学菊本
一般女子　新居浜ク

▽東北地区
高校男子　盛岡一　山形東
高校女子　涌谷高
一般男子　全仙台
一般女子　涌谷高ＯＧ

有力チームは？

各部門の有力チームをざっと眺めてみると

（一般男子）全日本総合二位の大崎電気(東京)同四位の桜丘会（愛知）前回優勝の大阪クラブ(大阪)前回二位の函館サンダー倶楽部（北海道）がトップクラス。

（一般女子）地元熊本クラブ（熊本）前回優勝の寝屋川クラブ（大阪）全日本優勝の愛知紡績（愛知）の三つ巴。昨年二位の明善クラブ（福岡）も侮れない。涌谷ＯＧ（宮城）や、全日本二位の日体大ク（東京）、昨年三位の全埼玉などはクジ運次第。

（高校男子）インター・ハイベスト16を有力チームに推しておくのがまず無難なのだが。しかし、興味はインターハイの予選失格組三国丘高（大阪）日川高（山梨）洛星高（京都）盈進高（広島）らの有力チームが全日本代表を退けて奮起登場するかで、これらのチームはレベルの高い地区にあって一クセあるチームだけに黒馬である。中京商（愛知）清水商（静岡）小松実業（石川）下関幡生工（山口）神代高（東京）桐生工（群馬）熊本市商（熊本）あたりの激しい争覇戦と見るのが順当。

（高校女子）熊本市高（熊本）対半田高（愛知）と云うインターハイ決勝の再現がみもの。しかしこの両者も、栃木女高（栃木）明善高（福岡）徳山（山口）有磯（富山）あたりの進出をマークしなければならず楽観は許せない。特に半田は東海予選で静岡城北高（静岡）と当る公算が大きく難行である。　（Ｓ）

※　※　※　※

話題のチーム③ 鳳高校教職員クラブの巻

○…第三回を迎えた全日本教職員選手権に出場したこのチームの最大の特色は、メンバーの全員が、そのチーム名の示す通り、鳳高校（大阪府立・大阪府泉北郡福泉町）の先生方で構成されているのです。

○…日本のハンドボール界始って以来の異色チームと云ってよいでしょう。チーム編成の動機は「各種競技のクラブ指導の強化と、教職員間の親睦」だそうですが、それにしても凡人は、すぐ草野球のチームを作りたがるこの御時世に、よくぞハンドボールチームを作って下さいました。メンバーの最年長者は辻野鹿雄先生」いや、失礼しました、辻野選手の三十七才、最年少は西野健選手の二十四才。この数字から、推しても、チームの和気あいあいたる試合ぶりや、練習ぶりが、うかがえるではありませんか。

○…練習は主に放課後、今度の大会は夏休みを利用しての出場で、こうした大きな大会に出るのは初めて。それだけに、張り切り方ものすごかったのですが、武運つたなく決勝ラウンドには失格しました。しかし、鳳高校チームとは過去一勝三敗。現役の高校チームから一勝あげているのですから、その球歴は立派です。

○…チームの中心は、日体大ＯＢの太田富夫氏。プログラムに載ったメンバーを一寸拝借しますと、腕に自信の面々は、太田監督兼選手以下、辻野主将、久保、宮沢、辻、陶山、西野、進藤、井上、阪本、北本、霜野、米田の十三人。

○…ますますの御活躍を、この明るいチームに祈るや切です。来年も、そしてこの他の大会にも出て来て下さいとお願いしておきましょう。

芝工大、38連勝遂ぐ

連勝を続ける芝浦工大（東京）は、春の関東学生リーグ終了後、第三回全日本学生、第十二回全日本総合大会に出場、全日本学生、全日本総合でそれぞれ四勝をあげ、昨年七月二日の対同志社大戦以来38連勝を記録した。この間の総得点七一〇、総失点三三五、一試合平均一八・七対八・八と云う素晴らしいスコアで十点以下の試合はわずか三試合（昨秋の対中大、今春の対慶大、今夏の対大崎電気＝延長前まで）である。

学生界

秋のシーズン展望

駒沢球治郎

早慶ナイターを皮切りに、秋のシーズンの開幕である。秋は屋外シーズンの決算期であり学生シーズンの決算期でもある。日本ハンドボール界のトップ、ゾーンと自他共に許す学生界は、錦秋を色彩る熱戦と好試合の連続となろう。また今季は特にルーマニア来日の成果を探る意味でも興味深いものがある。

秋のスケジュール

ルーマニアを迎えた国際試合以下、恒例のオールジャパンチャンピオンは、とどこおりなく終了しており、秋のビッグエベントは第十五回国体（十月二十六日〜三十一日・熊本県水俣市）東西学生秋季リーグ（十月中旬開幕、関東＝駒沢、関西＝西宮）、第四回全日本学生王座（十一月二十七日・西宮）の四大会と、開催を予定されている全日本教育系大学選手権、全日本実業団選手権（共に第一回、期日、場所未詳）が中心となろう。このうち、全日本実業団選手権は広島地方での開催が噂されており、斯界の懸案だった大会だけにその実現を喜びたい。具体案の発表が待たれよう。この他、第十回学生選抜東西対抗（十一月二十七日・西宮）や、第三回東日本学生選手権（十一月十三日・名古屋）の開催も確定しており、毎年のこと乍ら秋は学生のシーズンであると云った印象が強い。

勝続けるか芝工大

その学生界で、と云うより、全ハンドボール界この秋最大の関心事は芝浦工大が、昨年七月以来の無敗記録を何時まで続けるかである。八月三十一日現在38連勝、この間の総得点七一〇、総失点三三五、一試合平均実に一八・七対八・八で、最少得点試合は、今春の関東学生リーグで苦戦した対慶大戦の7—6である。この芝浦工大は、秋の学生リーグの前半は、Bクラス校と当るので、40連勝の声は聞けそうである。芝浦工大の行く手を塞ぐホープは、日体大、明大、中大、それに関学と云ったところである。関東学生リーグにおける芝浦工大対この三校のカードは、今秋最大のカードであり、また王座戦で四年連続芝浦工大と関学が顔を合わせれば、球趣はそのピークに達する。芝浦工大が今春に比べて著るしく変ったのはGK福本の進境と佐藤、塩川両ウイングの安定、それにHB陣がすっかり自信をつけたことであろう。CF山田のリードマンシップと巧技は相変らずだし、尾藤、村上の両FBも安泰、RI金山の精力的なプレーも魅力がある。その上、徹底した六人攻撃をマスターしつつあり、正に磐石の構えである。七連覇の偉業も決して至難ではない。

関東リーグ展望

「打倒芝浦工大」このスローガンは関東諸校共通のものである。何校が果してその目的を遂げることが出来るか、優勝争い、順位争い以上にそれはみものである。最有力と云われる日体大は、昭和32年秋以来、リーグ戦で対芝浦工大六連敗である。最近の日体大は昔日のようなたくましさが無い。ハンドボールの巧さは芝浦工大以上かも知れない。それでいて三年間王座をあずけ放しである。GK福田、FB久保田、FW井上、河上、栗山と要所に配す選手は何れも定評ある働き手なのだが、どちらかと云えば力より技の選手である。金山（芝工大）のような精力的なプレーを見せる選手がいない。それに最近の芝—日戦を見ると、日体大は戦う前から余裕がない。それが試合中リードしてもすぐ追いつかれると云う結果を招く遠因になったり、一度びリードされると追いつくのがやっと。追い越すための〃もう一発〃が無いままに敗れてしまう試合が多い。とも角も芝浦コンプレックスを無くすべきである。

明大、中大への期待

その点、明大や中大はスケールでは日体大に及ばないが妙に試合に図太さがある。特に明大は昨年、芝浦に黒星をつけた唯一のチームであり、今年の全日本学生決勝で顔を合わせた時は明大有利の声さえあったホドである。FWの正岡、浅野、横野、高田らは巧妙なローリング攻法を用いるようになった。マイ・ボールの時間を長くしようと云うわけだ。清水、佐藤、溝渕らのバックスが手固いだけに効果は大きい。中大は好、不調が激しい。大脇、平瀬、井、福士ら攻守に一流選手を配す中大の課題はFWのチームプレーの成長と、HB陣の奮起にある。大望を抱くに足る実力の持主だけに期待出来る。残る一部四校の中では早大が恵谷、長沢、吉田哲、平塚と特長のあるFWを組んでおり恵谷、長沢が好調だと上位も狙える。教大は、深美一人のチームだが、彼の得点力が抜群だけに及川、高橋あたりが当っている日はA級に伍す力を発揮しよう。長い低迷期からようやく立直り始めたと云う慶大は四十人近い部員を擁し、練習量も豊富である。CF木本、GK大塚兄はリーグ有数の好選手だし、若手にも優秀なのが多い。CH高久保FW辻、小野田らベテランの働きがカギである。八シーズンぶりに一部返り咲きの法大はエース吉村以下中里、柳原、田中、宮野らのFWは優秀の部類だ。うるさい存在になりそうだ。なお、二部では優秀新人の多い立大と前季一部の防大が強そう。順天堂大、東大あたりもチーム力を伸ばしている。

関学中心の関西リーグ

一方、関西リーグは、東同よう、関学の七連覇成るか、関学の独走をストップさせるものはどこかの二点に興味はしぼられている。関学は相変らず強力な陣容を誇って

おり、日向、市場、宮地らのFWは速、遅攻のスイッチも上手く、おまけに勝負強い。バックスの藤原、山渕、富川のトリオも健在だしGK小河も無である。欲を云えば安部、富川のHBに一枚、FWにもう一枚新鋭が欲しい。攻守兼備の村田とFW藤井あたりの成長が待たれよう。

関学としては、終盤の関大戦、同大戦にどう調子を持っていくかが難しい。関大、同大の対関学研究は盛んであり、関―同の対抗意識も深いだけに、この三巴戦は見逃せない。関大は突進力では日本一と云われる高村をエースに寺田、江尻、松田、池上のFWは侮れない。GK金原を中心とする守備もまとまっているのだが、試合運びの下手なのとバックスの無用の反則がいただけない。特に関学はFTを巧みに利用するのが上手いだけに、研究の要がある。春のリーグ、全学生と二度も大量リードを活かせなかった失敗をふり返るべきだ。同大は体力的によいものを持っていながら調子の出し方が遅い。いわゆる勝味が遅いのが欠点だ。しかし中江、石橋、今藤、植野らのFW力、神前、中島らのバックスGK中らは定評のある力を備えており優勝も可能である。結局、三者の優劣は試合展開力の巧拙にかかっており、僅かに関学にブが認められると云うところであろうか。まれに見る混戦状態だけに興趣も一しおである。この三校にとってイヤなのは京大の存在だ。川野、酒井、浅野のスリーセンター攻撃とGK本田が看板。野心満々としており惑星である。その他の四校は帯に短かしタスキに長し。しかし、春同率五位だった三校も今秋は序列がつきそうだ。中では、西本、荘林のFWと立花、片山らのバックスを擁す神大が一番やりそうだ。府大は、今春同大と11―12と云う好勝負をしており、バックスも固まっている。FWの出来如何では進出が期待出来よう。

逆に甲南大は小倉、弓削、大高とFWに好選手がおり、守備陣の奮起がカギである。一部と二部の橋を危く渡り歩いている立命大は福田を主力とするFWに見るべきものがある程度せめてB級の上に立つと云うぐらいの気力を見せて欲しい。二部では阪大と新進桃山学院大、それに名門大歯大あたりのトップ争いになるだろう。

王座戦 その他……

となると、十一月二十七日の王座決定戦はズバリ芝浦工大対関学の東西両横綱の激突と云うことになる。願ってもない顔合せである。以下可能性は芝工大対同大、芝工大対関大、日体大対関学の順で、大穴は日体大対同大、日体大対関大であろう。この他東北、東海秋の優勝者を集めた東日本選手権は順当なら東北大、芝浦工大、中京大のかみ合せとなろう。羽上田、近藤、伊藤らを擁す攻撃力に長けた中京大が芝工大にどんな挑戦ぶりを示すか一応の興味である。なお、第一回教育系大学選手権が開かれるとなると、優勝争いは日体大の独走、対抗教大、圏内に愛知学芸大、東京学芸大と云ったところに落着きそうだ。この大会は、そうした順位争いよりも、その副産される今後の成果の方に期待は大きい。

学生界に望むこと

学生界が、日本のハンドボール界の最高峰であると云うことは自他共に許していることである。それだけに、今シーズンの学生界が先のルーマニアチームの来日をどのように影響しているか注目してみたい。また、是非とも反省して欲しいのはバックスの無用のファールである。七月の全学生で両軍合わせて九十反則と云う大変なゲームがあった。審判団の厳正なジャッジングを期待したい。また、順位争いにキュウキュウとした小さな量見の試合態度も願い下げたい。勝てる相手、勝てそうにない相手が自ずと判っても……である。リーグ終了のたびに、一部八校制が論議されるなどみっともない話である。これは各大学のOB諸兄への希望だが、学生リーグの試合場にもっとマメに足を運んで貰うわけにはいかないだろうか。



（春季リーグ、日体大対芝工大戦より）

東西記者の予想順位

関東

	鴛尾武治（共同通信社）	小川励行（東京本社ディリースポーツ）	杉山茂（NHK）
①	芝工大	芝工大	芝工大
②	明大	日体大	中大
③	日体大	明大	日体大
④	中大	早大	明大
⑤	早大	中大	教大
⑥	慶大	慶大	慶大
⑦	教大	教大	早大
⑧	法大	法大	法大

関西

	深江幸次郎（関西本社ディリースポーツ）	隅田正彦（大阪本社スポーツニッポン）	渡辺一己（関西本社ディリースポーツ）
①	関学大	関学大	関学大
②	同大	同大	関大
③	関大	関大	同大
④	府大	京大	京大
⑤	京大	神大	神大
⑥	神大	立命大	立命大
⑦	立命大	府大	府大
⑧	甲南大	甲南大	甲南大

敬称略・到着順

高校生のための「ハンドボール」（その二）

岡村 昭二

＜FWのコンビネーション＞

(4) 走ること（続）

FWは走らなければならない。しかし練習過程においてただ走っていても意味がない。走り方にも色々の方法を加味して練習すべきだ。シーズンオフには特にロングを行い、少くとも一万メートル、四〇分のペースを目標としたい。コースの悪条件の場合は二〇分間連続なわとびも効果がある。脚力は持久力と共にスピードをつけなければならない。ハンドボールでいうスピードは勿論インターバル・スピード（一〇〇メートル十二秒台）である。シーズン近くなればそのためにインターバル・ダッシュの反覆練習は毎日の練習に欠かせない。この持久力とスピードの上に技術が加わるわけである。強いFWほど基礎となる脚力が十分である。体力旺盛な高校期に脚力増加のトレーニングを積むことは、あらゆる点で効果的だ。対ルーマニア戦で全芝浦工大が決して走りまけなかった。むしろFWにおいては鋭いシュートダッシュに素晴らしい冴えを見せ、終始6人攻撃、6人防禦の態勢で1時間完闘したことは、日常練習において基礎…走ること…を如何に重視していたかが分るであろう。最近の高校試合を見ても、走りが不足しているようだ。守備陣の技術の未熟さもあろうが、ボールが強肩なもの、ポイントゲッターに集中しすぎ、またポイントも得やすいため、大切な脚の練習が怠り勝ちになってはいないか。例えば、逆襲活動に入ってから純粋な速攻を組めるFWがいくつあるだろうか。技術的に云えば、速攻と遅攻をどのように解釈し、チーム技術として練習しているのだろう。遅攻といっても速攻のペースを切りかえただけで、スピードはいささかも落ちないはずだ。最近の遅攻はフリースローライン近くで行われるストーリングまがいのものに等しいように感じられる。これはやはり脚力が不足しているのではなかろうか。これから多い国際試合やオリンピックのためにも脚力鍛錬は是非真剣にやって頂きたい。

以上、パス、キャッチ、目（タイミング）、走ることとFWの基礎になる必修項目をあげたが次にFWとして是非練習しておきたいことを述べてみよう。

＜FWの練習法＞

1.ハンドリング（マンツーマン）

ハンドリングをつけるためには先ず徹底的にマンツーマンの練習をすることだ。マンツーマンに上達することは、FWとしての自信を明確につけさせてくれる。しかしマンツーマンはハンドリングのための練習であって、マンツーマンの練習ではない。ハンドボールはコンビで攻撃するのが本義であって、ドリブルを多用するマンツーマンは、是が非でも相手を抜いてシュートに持ち込むのではなく、攻めあぐんだ場合に、マンツーマンによって堅い防禦布陣に動揺を与え、味方FWの攻撃動作（切り込みなど）を容易にするためのFWコンビの一技術なのであって、マンツーマンの乱用はFWコンビを反って破壊に導くおそれがある。マンツーマンの練習は、ハンドリング、タイミングの自覚、巧ち性ある身のこなし（身体接触による皮膚感）などや、プレー上の自信（精神面）を会得できるものであるから練習時必ず行うようにしたい。

2. シュート

各自の得意（自然のフォーム）は、こわさない方がいいが、やはりオーバースロー（シュートの際、打点が高い）が最強力だ。アンダースローも早い動きとモーションであれば国際試合で通用するのを対ル戦で知った。サイドスローはノーマーク以外中途半端になり勝ちで、今後バック陣の強化に従い効果が少くなるのではなかろうか。ランニングシュートやサージャントジャンプシュート（垂直跳躍投球）も最近の試合に多く見うけられるようになり、効果も上っている。

シュートで一番大切なのはスピード、GK技術の上達と共にスピードとシュートフェイントが最も重要。

FWは、パスする時、キャッチする時、ドリブルの時、走る時、あらゆる動きは、すべてシュートに直結するものでなければならない。FWがゴール前でボールをもったら、先ずシュート、次に相手をぬく、次にパス、そしておいてホローと常にこの4段階を頭に入れておいて練習に活用してほしい。シュートに直結するパスは、キャッチは、ドリブルは、走り方はどうすればよいか研究してごらんなさい。

ロングシュート、30角度からのシュートも今後ますます研究すべきだろうし、ゴール前フリースローからのシュートも国際試合を考えて今迄の方法に一考を要しよう。ドイツ、ルーマニア両戦とも、ロングシュート、フリスローからのシュートが少なかったのは、ハンドボール・マンとして真のハンドボールをあらわしたのではなかろうか。

NS
名古屋精糖
取締役社長 横井広太郎
本部 東京都中央区日本橋小網町1の1
本社 名古屋市西区菊井通1の1
工場 東京 神戸 名古屋

中学校に於ける「ハンドボール」の指導

（その二）

山岡　二郎

「学校指導は技術に走るな」

球技ばかりではなく、他の競技に於ても学校に於ける指導者は常に対外試合が最高の目標におかれる。正課時はともかくも課外活動は必ずといってよい位そこに集中される。従ってその過程は全然論ぜられない。ここらに過去の体育指導というか、競技指導といったものの欠点があったのではあるまいか、華々しい競技会の結果によって有名校と叫ばれ、新聞紙上をにぎわしてきた点は現在もまだまだそうした傾向は強い或種目の競技に「△△校」というその蔭に多くの生徒は全然白紙に等しく第五時限を終れば、その後はグラウンドが一部選手に占められてそれが然も数時間にわたる猛練習がなされるといったようなことでは学校体育の立場からは決して許されないことでこうした事が一時的には良い記ろくを残すかも知れないが長い目で見ると決して成功しているとはいえない。

学校の正課（体育）の発表にしてもこれに似たようなことが言えるのではあるまいか過程ではなくて結果のみといった傾向が強い。見る者も当日展開されるものだけに目を向けて過程が論じられないといった結果になる。

一年、二年、三年と同じ教材で発展していく段階を見るといったような研究授業はあまり見られない、こうした発表がなされるようになればどうしても積み重ねの指導がなされなければならないことがよく解るし指導者の留意点も指導上の問題点もはっきりするこれが最も大切なのである。

＜指導の工夫＞今一つは指導上の工夫が足りないということである。球技指導だからといって球の技のみの指導がなされる（最もダッシュの練習をしたりはするが）何れの競技にも基本となるものはやはり走である。他の投の基本も勿論大切だが特に走の指導が目立つ。

野球選手が走力の悪い為に結果的にはヒットがヒットにならなかったり、ダッシュスピードが欠けていて守備態勢立ち直りを許す結果となるといった場合が多い。ボールを扱っての走の指導というがやはり持たない走からはいるべきでこの走の研究は小、中、高、大学と何れもまづい、これは小から中へ高へとの積み重ねができてないからで特に中学時代の走の指導は一番大切のように思う。一般に大学でもだが見ていて非常に重い走り方のように思う。なぜもう少し軽く、速く走れないのかと思うがやはりアームワクション、足のあげ方といったような細かな点のコンビができていない。その上にボールという別物が加わるのでよけいに走の技がまづくなる。常に「もっと走れ」「速く走れ」とムチを打つがこのAをどうしたら速く走らせることができるかの考え方が先きのように思う。「君の足の運びは、手のふり方は」の指導をしているところを見たことがない。

試合といい練習といい、こうした折に常にそうした細かな点で正しい指導というか、コーチャーはアドバイスすべきものはないか。

中学に於てはこの基本を一時間の授業中どこでどうしてなすかということが大切である。だからといって走を一時間やる。然も生徒のついてこないような、一人よがりの指導ではいけない、指導法の工夫がここに必要になってくる。指導を、遊ぎ化し、競技化してなされるなら単純な、一つの走にしても充分生徒も楽しみながらやれるのではあるまいか、小学校の一年生を取ってみて、「ハナ」の「ハ」を一時間かけて指導するあの指導法の研究を考えたら「走る」という一つの動作はへの字一字のような単純なものではない結構時間の不足をきたすような指導もできると思う。高校や大学になってからの走ではなくて積み重ねの基盤になるこの時代の工夫研究指導をいっているのである。技術指導に重点がおかれ試合目あての指導を考えるからこうしたものの大切な部分が抜けてくる。結果的には、却ってのびをきたさない悪い結果になるのではないか。同じ位の身長をもち同じような体重であっても諸外国の選手に驚くべき幾つかの優れた点を見ることができた。あの選手達の一投、走皆学ぶべき点が多かったことについては今更言うまでもないと思うが、みんな揃って基本的なものをマスターしていた。これは日本の指導的な面になる人達は見逃がしてはいない。

ボールの大きさについても、数年も前から叫ばれていながらちっとも取り上げられていなかったが、もうそろそろ取上げて研究を進める段階ではないか。日独対抗で得た、ノードリブルの攻撃は今日の成績の上にはっきりとあらわれ、それを取り入れたチームが今日の大をなしつつある現状は見のがせない。このスピードをどうして得るかの下の研究こそ学校体育がじっくり考えるべきことであろう。別に大したフォーメーションを持たないチームだったといわれる、ルーマニアチームがあれだけの強さであったことにも深く掘り下げて考えられる面は多分にある。

山岡氏、ローマへ

本誌「中学校におけるハンドボール教室」の執筆でおなじみの山岡二郎氏（五四）＝東京都ハンドボール連盟理事＝はローマオリンピック会期中、ローマ市郊外に設営される「青少年オリンピック・キャンプ」の日本選手団顧問として八月八日羽田発ローマに向った。

山岡氏を始めとする一行六名は西ドイツその他ヨーロッパ各国におけるスポーツ少年団の組織、運営およびこれらの結成にいたるまでの経偉、オリンピックキャンプの運営、イタリアのオリンピック・ムーブメントにのせた青少年対策の実体を調査するが山岡氏は、出発にあたって「ハンドボールの本場ヨーロッパ各地に立寄るので、時間が許す限り、彼地のハンドボール関係者と話合いたい」と語っており、お土産話が待たれている。

投書欄

ハンドボール私考

私は駒沢に住んでいるために、ハンドボールの大会を見る機会が多い。もち論、私自身はハンドボールの経験はないが、素人なりにこの競技の面白さを見つけて楽しんでいる。さて、時々ハンドボールを見ていて気がつくのだが、これほどファールをおおっぴらにやれる(?)ゲームも珍しいと思う。詳しいことは知らないが、ファールも一つの策戦ではないかと思ったりファールも練習のうちに入っているのではないかと考えてみたりする。しかし、仮に策戦であったとしても、反則は反則であり、そのためにゲームの進行が一時中断されてしまうのは、まことにもって面白くない。しかも気をつけていると同一選手が何回も何回もファールを繰り返しているところを見るとバスケットボールのようにファールを何回かすると退場を余儀なくされると云う規定もなさそうだ。私がファールをおおっぴらにすると云ったことはこのことだ。ファールが多い試合は面白くない。全体の動きが一瞬でも止ってしまうからだ。ハンドボールでファールを多くする理由は、ファールが余り失点に結びつかないからだろう。フリースローと云うのはどうも上手くシュートにならないようだ。そこで思うのだが、もっと14Mスローを多くしてみたらどうだろう。それともファールを何回か犯したら残りの試合時間は出場出来ないと云うルールを設けることだ。それともう一つ、35Mラインと云うのも私には無用のラインに見えてしようがない。私がハンドボールを見始めた頃は、たしかあのラインはなかった。どうも、その時のほうが面白かったような気がする。と云っても、ハンドボールも国際競技である以上、日本が勝手にルールを変えてしまうなどと云うことは出来ないだろう。どうも素人は勝手なことを云いすぎると云はれないうちに筆をおこう。終りにハンドボール界の発展を心からお祈りしています。

（東京・駒沢すみと）

国際試合をひんぱんに

ルーマニアチームが帰ってハンドボールの国際試合ともまた当分の間お別れである。国際試合がハンドボールで行はれたのは戦後二度目で、この前西ドイツが来た時から三年以上経っている。この分だと、この次はオリンピック頃までハンドボールの国際試合は見られないかも知れない。そこで私は協会の方々にお願いしたいのですが、どうか一年に一回、それがムリなら二年に一回、必らず国際試合を開催するように努力していただきたい。また、室内の国際試合や女子の国際試合も是非実現させて欲しいと考える。ハンドボールはまだまだ知っている人が少ない。そのためにも、どうか半ば定期的に国際試合がひんぱんに開けるような態勢を一日も早く作って欲しいものだ。そうすれば競技人口も、ファンも増加するし、世界のレベルを学ぶにも知るにも絶好である。協会の方々のお骨折りを重ねて期待します。

質問欄

問 ルーマニアチームは背番号が統一されておらず、またノーストッキングのようでしたがこれはルール違反ではありませんか。（横浜・武宮征男）

答 昭和三十五年度ハンドボール競技規則によると数字の色については、はっきりユニホームの地色と区別されなくてはならないと規定されていますがGKが1RBが2……そして交代のGKは12交代のFPが13をつけることは単に「望ましい」と云うだけで、そういう風に統一してつけなければいけないと云う規定はありません。ルーマニアの場合は長途の遠征でもあり各人の持番号を決めておいた方が便利であったわけでしょう。なおストッキングについては特に規定はありません。余談になりますがストッキングをつけるなら全員が、つけないなら全員が統一したいもので、同じチームの中ではいたり、はかなかったりしているのは見苦しい感じを与えます。

問 ルーマニア選手団の最長身選手は誰ですか。また西ドイツの時と比べてどうですか（東京・一高校生）

答 GKのルドルフ・カベルプッシュ選手の一八八糎が最高、なおフィールドプレィヤーではFBのサビン・マルク選手の一八七糎でした。来日西ドイツチームの最長身はFWのロベルト・ヴイル選手の一八七糎でした。

問 昨年世界選手権に参加を予定された時の日本チームのFWはどんなメンバーでしたでしょうか（茨城・中村生）

答 浅野克彦（日体大OB）浅野崇（明大OB）竹野泰昭（日体大OB）村中明郎（関学OB）山田幸男（芝浦工大）高村武彦（関大）の六名でした。

問 ルーマニア対全関学戦における全関学FB八田選手退場の理由を問う。（京都市・村上生）

答 同試合終了後、クンスト主審は「粗暴なプレーでゲームの進行を妨げたから」とのみその理由を云っておりましたが、ヨーロッパでは、ボディチェックによる相手の突進阻止は大巾に許されており、あの場合は八田選手のハンド・ストップ（すなわちホールディング）が強過ぎたためのペナルティと思はれます。クンスト主審は常々、ホールディング、プッシングには厳しいジャッヂが必要だと云っておりました。

質問歓迎、記録、審判上、技術上の問題をハガキに書いて編集部までお寄せ下さい。氏名、年令明記、但し紙上匿名可。

ハンドボール豆辞典

七人制の公式試合における最多得点の記録は昭和三十一年三月十日第二回全日本総合室内で日体大BがJクラブから41点奪ったのが最高だろう。またこの試合の41対0と云う点差は十一人制、七人制を通じての最多得点差試合である。

ルーマニア・チームの印象はまだ昨日のことのように生々しいが、そろそろ彼らの残していったものを整理してよい時期だろう。

八月中旬秋田で行なわれた全日本選手権のプレーに、ルーマニアの影響がどのように現われていたか、というのが今月の問題である。

実のところ全日本選手権は台風11号12号の連続襲来にたたられて技術や戦術をどうこういえるコンディションではなかった。グラウンドは足首まで没するぬかるみで、ただ全選手がせい一ぱい動き、早くパスをし、シュートをするという他にやりようがなかった。芝浦工大が優勝したのも、そういう基本技に忠実であったからである。

ルーマニアが、来た時にある役員が「彼らのやっていることは何も珍しいことはない。日本でもやっているようなフォーメーションしかやっていない」といっていた。この言葉はちょっと聞くと「日本とルーマニアには技術の差はない。ただ身長や体力の差でかなわないだけだ」というように誤解されやすい。だがその真意は「彼らは日本選手も知っているはずの基本技術をより忠実に、より確実にやることによって、身長や体力の優位を生かしている」ということであろうと思う。

今月の問題

躊らわず六人攻撃の方向へ

＝全日本にルーマニアの影響を探る＝

基本技のマスターと体力養成が課題

牛木　素吉郎
（読売新聞社運動部）

たとえば六人攻撃、六人防禦を常時行なうというのがルーマニアの特徴であったが、攻撃と守備の両面で最大の力を出そうとするなら、現行のルール上許される最大限の数を投入することは当然であろう。そのためには当然二人が相手と味方のゴールを往復しなければならず、そうとうの体力とスピード、全員が攻撃に参加できる技術が要求される。相手が六人攻撃でくるのに、こちらはそれをやるだけの体力がないというのでは勝負を放棄するのも同然である。

全日本選手権に出場した一流どころのチームは、もちろんみな走力と体力を養って六人攻撃、六人防禦の方向を目ざしているように思われた。ベスト4に残った大崎電気、全日体大、桜丘会などはそうであった。ただし実際の試合の上にその方向が全面的に表われていたとはいえない。芝浦工大でさえも、泥んこのコンディションのせいもあって、手ぬるい攻撃をしている場面がしばしばあった。

全チームが、少なくとも芝浦工大と同じていどの六人攻撃を目ざさなければならない。大学の一流チームの中に、まだこの方向にそっぽを向いているものがあるのはフシギである。

全面的に六人攻撃、六人守備をとることになれば、当然三十五メートルラインの間の中盤（ミッドフィールド）が、勝負どころの一つになってくる。ルーマニアのチームが、この間を大きなストライドで疾風のように走りぬけて守備側を置きざりにした光景は忘れられない。ルーマニアは広いグラウンドでハンドボールをすることの面白さを改めて教えてくれたようなものだった。

ところが全日本選手権では芝浦工大のほかはミッド・フィールドをほとんど活用しなかった。田んぼのような地面でドリブルを試みて芝浦工大の守備陣にボールを奪われるという愚かなことが何度もあった。

一人か二人のスター・プレーヤーに頼り切るという方法も今後は通用しなくなるに違いない。

ルーマニアのチームはブルガルのような超特級のエースを持っていたが、ブルガルも守備をやってみせたし、他のバックスの選手も随時攻撃に参加していた。六人攻撃をやるなら、どの選手も守備と攻撃の両方に回転できるのが理想であることはいうまでもない。

こうみてくるとルーマニアの残していったものは、日本のハンドボール界の今後の方向に大きな示唆を残しているが、まだそれを各チームが消化してはいない。

また、国際試合で得られるものは、単なる攻撃のフォーメーションなどを学ぶということだけではない。むしろ基本的なプレーや動作を、より強い相手に相対することによって磨くことが貴重な経験になるものである。そういう意味

ニュース スクラップ 新聞記事から

小中高校の体育は教育課程の改定にともない明三十六年度から男子は中学、高校を通じて男らしく鍛えるために球技を通じての"鍛練主義"で貫ぬくことになり、女子はダンスに力を入れるなど、いままでに比べ"女らしさ"を強調することなどその基本方針を文部省では決めた。このため中学男子では体育の総授業時間の四割を球技にあて、さらに高校では、現行の体育七単位を九単位にふやし、特に球技には力を入れA（バスケットボール、ハンドボール）、B（バレーボール、テニス）、C（サッカー、ラグビー）のABC三部の各部で必ず一種目以上をやることになった。（七月二十二日付毎日新聞ほか各紙より抜すい）

※

全日本学生ハンドボール選手権は芝工大の三連覇に終った。これで同大学は昨年のこの大会以来三十四連勝したそうだ。そのスポーツがポピュラーな種目にせよ、地味なスポーツにせよ三十四連勝と云うことは大へんなことである（中略）ハンドボールはいままでのオリンピック種目にはないし競技人口の少ない地味なスポーツだ。しかし、スポーツは種目はなんでもやる人が楽しく練習し、試合をしていればいいと思う。三十四連勝、おめでとう。（七月十九日付報知新聞ペナント欄より）

協会だより

担当 安藤純光

で、今後はちゅうちょなく六人攻撃への道を進むこと、そのために全員が走る、投げる、という基本技と体力に磨きをかけること、国際試合のチャンスを増やすことが課題である。

●今号では、最近国際ハンドボール協会より発表されました加盟各国のチーム数及び競技者数を御紹介致します。表でもわかりますように、世界のハンドボール界に於て常にトップレベルにある国々では非常に多くのチームと競技者をもっているようです。我が国に於ても、ハンドボールが更に普及し、底辺が拡大されることが、この方向えの一つの道である様に思はれます

国際協会加盟各国協会のチーム・競技者数統計（国際ハンドボール協会広報21号1960年7月発行）

	チーム				競技者				創立年
	男子	女子	ジュニア		男子	女子	ジュニア		
ドイツ連邦	14,100	2,500	11,000	27,600	211,000	38,000	180,000	429,000	1949
ドイツ民主	2,045	934	2,660	5,639	30,475	14,010	39,900	84,385	1948
アルゼンチン	25		10	35	538		192	730	1921
オーストリア	229	50	140	419	4,982	915	3,078	8,975	1925
ベルギー	42	2		44	1,116	19		1,135	1946
ブラジル	9			9	165			165	
カナダ		8クラブ11チーム			140			140	1953
キューバ		資料なし							
デンマーク	2,111	1.759	1,867	5,737	31,663	26,392	28,002	86,057	1932
スペイン	250	50	1,412	1,712	3,048	683	15,886	19,617	1941
フィンランド	45	20	55	120	750	540	1,170	2,460	1941
フランス		407クラブ			10,498	1,101	2,569	14,168	1941
ハンガリー	734	688	224	1,646	13,170	12,120	2,318	27,608	1933
アイスランド	17	15	45	77	721	477	1,105	2,303	1957
イスラエル	10		10	20	200		260	460	1950
日本	1,128	780	1,200	3,108	44,800	23,400	48,000	116,200	1938
ルクセンブルグ	7		12	19	100		150	250	1945
ノルウェー		500クラブ			20,000人				1937
オランダ	475	615	1,086	2,176	8,149	8,712	15,035	31,896	1942
ポーランド	346	99	304	749	6,283	2,216	3,468	11,967	1959
ポルトガル	48		22	70	1,233		429	1,662	1938
ルーマニア	488	415	534	1,437	9,484	8,532	12,854	30,870	1936
スェーデン	1,400	700	500	2,600	17,000	900	5,500	23,400	1931
スイス	1.360		500	1,860	16,000		6,500	22,500	1939
チェコスロバキア	246	104	246	596	3,694	1,558	3,698	8,950	1947
ソ連	300	160	200	660	84,000	19,000	26,000	129,000	1956
ユーゴスラヴイア	6,310	2,300	1.720	10,330	100,960	32,200	36,690	169,850	1949

編集後記

▽…残暑御見舞申し上げますなどと申しております間に、もう、まもなく秋のシーズンの開幕です。

▽…初夏から盛夏へ、ビッグエベントが今年ほど続いて、われわれを楽しませてくれたシーズンも珍しいようです。それらのハイライトを今号は集めてみました。

▽…ルーマニアに学ぶ特集は今号で一応打切りたいと考え、各視野からの原稿を揃えておきました。国際試合で得た教訓を大いに活かして斯界ますますの発展を祈りたいものです。

▽…早いものでもう本誌も第三号です。月刊にしたらなどと編集員を感激させる声も聞えておりますが、それには一人でも多くの読者が欲しいのです。どうか大いに宣伝して、皆さんでこの雑誌を育ててやって下さい。

▽…ですから、皆さんの編集上の批判、注文大歓迎です。原稿もどしどし送って下さい。

▽…来号から「日本ハンドボール史」がいよいよ登場します。御期待下さい。執筆者にバラエティを富ますべく目下熟慮中です。

▽…地方記事の充実のために地方在住の方でこの雑誌のために原稿を定期的にお寄せ下さる方を求めています。とりあえず東北、北陸、中国、四国、九州の五地区の方でどなたか居らっしゃいませんでしょうか。

日本ハンドボール協会公認・昭和35年度公式試合球

新製品
皮革18枚貼製

日本ハンドボール協会公認球



ミカサ

ミカサ ボール

製造元　明星ゴム工業K.K.・総発売元　K.K.三矢本社

日本ハンドボール協会公認球

一番広く使はれて居る

SCEPTRE

セプター

サービス部
新宿区新宿２丁目電停前
TEL (341) 2979・1016

望月運動用品KK

東京都墨田区横川橋４丁目６
TEL 本所 (622) 0746・0858

比類なき耐久力

最高の品質を誇る ミカドハンドボール



日本ハンドボール協会公認球

TRADE MARK

ミカド商会

東京・豊島・巣鴨・7丁目1696
TEL (941) 2635・6592

日本ハンドボール協会公認球

ピーコック印ボール



革貼と縫いの
ピーコックハンドと御指定下さい

前田運動具製作所

東京・江東区大島町５－538　　TEL (681) 9197・9198

Osaki

高性能・高確度を誇る
広範囲および精密級

積算電力計

営業品目

計器用変成器
標準用計器用変成器
誘導型自動電圧調整器
静止型自動電圧調整器
積算電力計交流試験台
配分電盤・制御盤
Sブレーカー・ノーヒューズブレーカー
配電線事故捜査器
絶縁油耐圧試験用変圧器

大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場　東京都品川区五反田 1-263　電話白金(441)2111(代表)
蒲　田　工　場　東京都大田区原町 10　電話蒲田(731)4013-5, 3222

Osaki

ハンドボール　第一巻第三号　昭和三十五
発行所　日本スポーツ新聞　電話(251)代表一一四一～四番　振替口座東
定価五十円